昭和四十七年三月

宮崎県郷土文化財総合調査報告書

宮崎県教育委員会

序

この報告書は、県教育委員会が昭和四十二年度に管内市町村に協力を依頼し、予備調査として県内各地に残されている中世から近世までの絵画・彫刻・工芸品・建造物等の目録を作成して昭和四十三年度から三カ年計画で本調査を実施した結果の集録であります。

この調査は、文化財保護条例制定等がしだいにすすめられ文化財保護への気運が高まりつつあるときでもあり、また市町村からの要望もあって真に価値ある文化財の保存をはかるための価値判断の資料とするため、県内の社寺あるいは民間に残るすべての文化遺産を対象に調査したものであります。対象の物件が多岐にわたっており、かつ専門的識見を必要とするため、文化庁から種目別に斯道の調査官の派遣を依頼して、県を北・中・南部の三地区に分け、総合調査を実施したものであります。

古代遺跡の豊富さにくらべて中・近世の資料に乏しいといわれている本県に、さきに実施した「郷土文化財基礎調査」とあわせ数多くのすぐれた文化遺産が残されていることがこの調査により確認された次第であります。

今後、市町村におきましてもこれを文化財保存活用の資料にしていただくことはもとより、これが広く県民各位の郷土の文化財に対する認識と理解につながり、文化財愛護への一助ともなれば幸いと信ずるものであります。

おわりに、この調査に終始ご協力ご指導いただいた文化庁伊藤延男田辺三郎助・郷家忠臣の各氏に対しまして深甚の謝意を表する次第であります。

昭和四十七年三月一日

宮崎県教育委員会教育長　穂積正晴

目次

第一部……**県北地区の文化財**（昭和四十三年度調査）

一、彫刻の部……1

二、工芸品の部……2

三、建造物の部……4

県北地区の文化財（図版）……5

第二部……**県南地区の文化財**（昭和四十四年度調査）

一、彫刻の部……39

二、工芸品の部……41

三、建造物の部……42

県南地区の文化財（図版）……45

第三部……**県中地区の文化財**（昭和四十五年度調査）

一、彫刻の部……107

二、工芸品の部……109

三、建造物の部……110

県中地区の文化財（図版）……111

資料篇

例　言

一、この調査は、次の日程で実施した

昭和四十三年度（県北地区）

九月　六日　高千穂町
七日　高千穂町
八日　旧上野村、五ケ瀬町
九日　日之影町、北方町
十日　延岡市
十一日　北浦村、北川村、東郷町
十二日　南郷村、西郷村
十三日　椎葉村
十四日　諸塚村、西郷村
十五日　北郷村、門川町、日向市

昭和四十四年度（県南地区）

十月二十三日　野尻町、えびの市
二十四日　須木村、小林市
二十五日　小林市、高原町
二十六日　高崎町、山田町
二十七日　都城市
二十八日　高城町、山之口町
二十九日　三股町、串間市
三十　日　串間市
三十一日　串間市、南郷町、日南市
十一月　一日　日南市、北郷町

昭和四十五年度（県中地区）

十一月二十四日　宮崎市
二十五日　田野町、高岡町
二十六日　国富町、綾町
二十七日　佐土原町、西都市
二十八日　西米良村、佐土原町
二十九日　高鍋町、木城村
三十　日　都農町、川南町、新富町、佐土原町

二、調査件数

	彫刻	絵画	工芸	建造物	古文書	民俗資料	計
県北地区	九	三七	四一	四三	六五	二六	二二一
県南地区	四〇	一一	五八	四一	一一二	六五	三二七
県中地区	八二	二〇	三三	三〇	二四	二五	二一四
計	一三一	六八	一三二	一一四	二〇一	一一六	七六二

第一部 県北地区の文化財

昭和四十三年度調査

一、彫刻の部

文化庁・文化財調査官　田　辺　三　郎　助

宮崎県北部においては、前回（註1）の調査で、高千穂神社所蔵の神像と鉄造狛犬とが注目すべきものとしてとりあげられ、すでに県指定されている。総体に仏教遺物の少ない当県下においては、他県にくらべて古彫刻に期待しがたいが、今回の調査（約三〇件）において、平安時代の作例が発見され、また全国的に数の少ない鉄造狛犬を見出したことは望外の幸せであった。

註1、昭和三十八年度から昭和四十年度までの郷土文化財基礎調査のこと。

一、木造十一面観音立像　一躯　（図1）

延岡市須美江町　普門寺

像高八八センチ、檜材の一木造りで、いわゆる平安初期一木彫像の風をのこしたものであるが、総体におだやかなまとまりがあり、製作は十一世紀にはいってのものであろう。当地方では、小像ながら本格的な平安古像として注目すべきであろう。頭上の諸面、光背、台座等が後補のものとかわり、手指に若干の欠損があり、また虫蝕が認められるが、大容は幸いに改変されていない。

一、鉄造狛犬　一対　（図2、3）

高千穂町　向山神社

高さ阿形四三・二、吽形四四・二センチの狛犬一対で、頭部は通常の狛犬よりも獅子頭にちかい越を示し、躰部も一種の形式化がみられて、高千穂神社の鉄造狛犬よりはやや下り、南北朝頃の製作と考えられる。しかし鉄造の狛犬は全国的に数が少なく、本県の二例を除いては栃木県に一例を知る位で、保存の価値は十分認められる。二軀ともに現在尾を失っている。

一、木造地蔵菩薩坐像　一躯　（図4）

高千穂町上野　竜泉寺

像高一五八センチ、県下ではめずらしい大きな像で、現状表面は全く後補の彩色におおわれ、各所に彫り直し、埋木等があって原容を損じているが、像の中心部は頭、躰部を通して大きな一材から木取りしているようで、その骨格は平安時代中期頃のものと考えられる。後補の部分を取り除いても、おそらく当初の姿を明確にしがたいものとおもわれるが、当地方にもこのような古い大作があった証拠として貴重視せられる。

一、木造阿弥陀三尊像　三躯　（図5、6）

西郷村田代　大雄寺

像高は中尊五二・八、両脇侍各五四・五センチ。中尊像内に応永三十二年（一四二五）の造立墨書銘があり、しかもこの地方での製作であることがわかる。作風はまさに南北朝風を伝えた当時のもので、地方作風ともいうべき粗豪な趣があって、当代、当地方の典型といえる。中尊の台座に大永三年の修理銘があり、台座の一部はこの時の補作である。

一、木造金剛力士立像　二躯　（図7、8）

延岡市大武町　大武寺

像高各二六〇センチ。像内に寛文八年（一六六八）、京大仏師光雲の墨書銘があり、江戸時代前期の大作として注目される。作者が京都の仏師であるだけに当時のものとしてはまとまりもよい。

二、工芸品の部

文化庁・文部技官　郷　家　忠　臣

一、梵鐘　一口（図9）

東郷村大字山陰字羽坂羽坂神社

法量 総高六八・三糎、龍頭高一〇・四糎、笠盛三・三糎、鐘身高五五・六糎、撞座径五・八糎、撞座中心より口縁までの高一五・〇糎、口径四四・五糎、乳高一・四糎、径一・九糎、駒ノ爪幅三・七糎、高一・八糎。

品質形状 鋳銅。笠やや盛上り、龍頭小さく鈍い。湯口（長四・七糎、幅一・一糎）は龍頭に平行に並ぶ。乳四段四列。池ノ間銘文陰刻、二区。撞座二箇、文様は未詳かでなく磨滅しているが、通常の蓮華文ではなく、菊文散しのようでもある。駒の爪（口縁部）の出は大きく張る。破損は撞座の上下に割目がある。

銘文　奉施入日羖新納院山毛保　（第一区）
冠嶽三所大権現御宝前
右之趣者心信之檀那
無病無脳忌災延命
家内安穏子孫繁昌
富貴自在心中所求皆
令満足如想之故也
依御祈念如斯
天文十八年己酉七月吉辰日　（第二区）

願主
天氏中候大炊左衛門尉
重昌
白敬

諸行無常　是生滅法
生滅々已　寂滅為楽

説明 冠岳の北頂に鎮座し、祭神は伊邪那岐命、遠玉男命、事解命。旧称冠岳大権現といったが、明治四年羽坂神社と改めた。往古は冠岳天狗岩のもと西向に鎮座されたが、後土門天皇文明年間中に冠岳権現山に、昭和六年には現在の羽坂と変遷したという（東郷村史）。

この梵鐘は比較的小形であって、乳は葬状、撞座の位置は一寸高い。古様さがあらわれ、時代の主流をあらわした造形精神はあらわれていない。そして、その鋳造技術もそれぞれ優秀とはいわれないが、この羽坂神社鐘のもっている価値は次のことと思われる。

第一に、宮崎県下における在銘鐘（和鐘）の最も古いものの一として遺っている。この年代のもので古いということは不思議であるが、その原因は西南の役に県下が薩軍の造兵所の役割として、梵鐘などが兵器の材料に使用されたからであると思われる。

第二に銘文が歴史学、地史学的な文献として貴重である。それは「新納院山毛保」の地に冠嶽、すなわち現在の東郷村冠嶽が属していたということである。

「院」とは租税を収納する倉院の収納地域を指した語で、豊臣秀吉以前の行政地域名でもある。

「新納」とはその院を司する長官の名で、島津氏の一族である。

以上の意味でその貴重性を問われているのである。

一、銅鏡

椎葉村下福良　十根川神社

(1) 変形四獣四乳鏡　二面　（図10・11）
径九・四糎　素文鈕　漢式鏡　（古墳時代）　火災に遭って肌があれている。

(2) 禽獣葡萄鏡　二面　（図12・13）
径一一・一糎　素文鈕　隋唐式鏡　奈良時代　火中肌。

(3) 双雀梅花柳文鏡　（図14）
径一一・七糎　花文鈕　平安末～鎌倉初。

(4) 双雀菊桜花折枝文散鏡　（図15）
径八・八糎　花座円鈕　鎌倉時代

(5) 竹葉散双雀鏡　（図16）
径一一・二糎　花文鈕　鎌倉時代

(6) 双雀松竹洲浜文鏡　（図17）
径一一・一糎　花文鈕　鎌倉時代

(7) 双鶴松流水文鏡　（図18）
径一一・三糎　花座文鈕　鎌倉時代

(8) 双鶴松洲浜文鏡（蓬萊鏡）　（図19）
径一一・三糎　亀甲文鈕　南北朝時代

説明　このほかに当神社には室町時代から桃山時代作銅鏡五三面および江戸時代の作銅鏡六一面がある。総計一二四面におよび多数の奉納鏡のある神社は東臼杵郡南郷村、神門神社の銅鏡と比較される。

平安時代以前の鏡が伝世品か出土品かの判断つにいて、その肌が火災に遭って判明することができないが、その他の鎌倉初期以降の鏡は伝世品と思われる。しかし、全体小形のもので、鋳造技術の優秀さについて傑出しているといいがたい。

ともあれ、多数の奉納鏡が遺存していることは、この神社の永い歴史を物語り、この地方の歴史と結びついた貴重な資料である。

（附記）

「日向地誌」より当社についての文章を抜萃する。

村社ナリ十根川ニアリ社地広二町二段十八歩大己貴命ヲ祭ル八村大明神ト云明治四年辛未今名ニ改ム例祭十一月十五日社傍ニ老杉一株アリ周九尋蓋シ数百年ノ物ナリ遠クシテ之ヲ望メバ鬱々トシテ衆門ニ秀ツ

三、建造物の部

奈良国立文化財研究所
建造物研究室長　伊藤延男

建造物関係でもっとも注目されたのは、

一、十根川神社本殿内宮殿　（註1）一棟（図20）

椎葉村である。

これは、もとの本殿であって、三間社流見世棚造（註2）、屋根板葺、正面柱間一八七・五センチと、小規模であり、簡素な形式でなる。しかし、室町末期の様式を濃厚に持っている。地方的なズレを考慮に入れても、おそらく桃山時代前後の建立とすべきであろう。本県下においては、古い様式を保持するものといえよう。

註1宮殿は厨子のこと。
註2見世棚造は小規模な社殿に用いる形式

次に民家については、折にふれ数棟を調査したが、組織的な選び択はないので、何等かの決論を出すまでには至っていない。この方面は他日本格的な調査が行なわれることを期待したい。

次に石造物についてのべる。石造物のうち本県にもっとも特徴的なのは、六地蔵幢である。その代表としては、すでに延岡市内藤記念館内のもの（弘治三年銘）が県指定を受けており、その他にも天文年間のもの数基が知られているが、今回の調査によって、さらに十五基を加えることが出来た。しかもそのうちには、

一、六地蔵幢　（永正一八年（一五二一）銘）※一基（図21）西郷村　大雄寺

一、六地蔵幢　（大永二年（一五二二）銘）一基（図22）北川村松葉観音寺

一、六地蔵幢　（享禄五年（一五三二）銘）一基（図23）北浦村昌雄寺

一、六地蔵幢　（天文六年（一五三七）銘）一基（図24）延岡市常楽寺

一、六地蔵幢　（天文一〇年（一五四一）銘）一基（図25）延岡市内藤記念館

一、六地蔵幢　（天文一二年（一五四三）銘）※一基（図26）東郷町山陰

一、六地蔵幢　（天文一七年（一五四八）銘）一基（図27）延岡市熊之江

等、今回新発見のものをも含め、初期に属する遺品が数多く発見されたことは収穫であった。（※は、完存していないものを示す）

さらに、興味があるのは、それぞれ特色ある形式を有していることである。この変化が何に起因するかは、今回の調査範囲だけからでは確言しがたい。六地蔵幢はなお県下に多数発見されることが予想されるので、それらを広く調査した上で、結論を見出したい。

六地蔵幢以外の石造物では、

一、五輪塔　二基（図28）日向市曽我の森

一、五輪塔　二基（図29）北川村川坂

が、形も大きく、室町初期に遡るかと思われるほか、室町末ないし桃山時代の地方豪族の墓所と考えられる石塔群には

一、石塔群　（図30）延岡市貝ノ畑

一、石塔群　（図版31）北浦村市尾内

があった。

県北地区の文化財

（図版）

図 1　　木造十一面観音立像

（延岡市善門寺蔵）

図 2　　鉄 造 狛 犬（吽形）

図 3　　鉄 造 狛 犬（阿形）

（高千穂町向山神社蔵）

図 4　　木造地蔵菩薩坐像

（高千穂町竜泉寺蔵）

図 5　（中　尊）

図 6　（脇　侍）

木像阿弥陀三尊像

図 7　木造金剛力士立像（阿形）
（内藤記念館蔵）

図 8　木造金剛力士立像（吽形）
（延岡市大武寺蔵）

図 9　　梵　　鐘

（東郷町羽坂神社蔵）

図 10　　銅　　鏡（椎葉村十根川神社蔵）　　（その1）

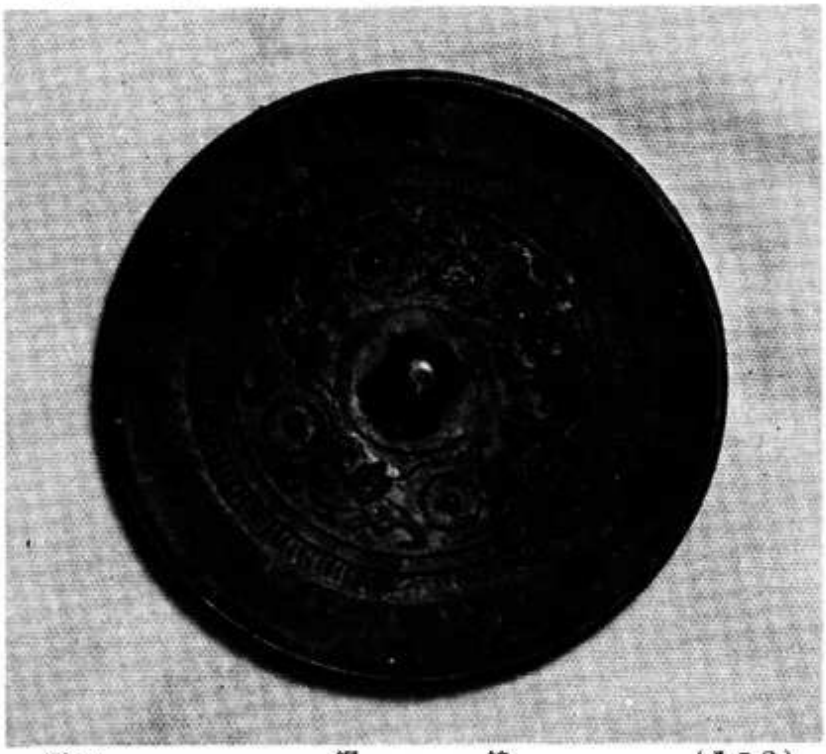

図 11　　銅　　鏡　　（その2）

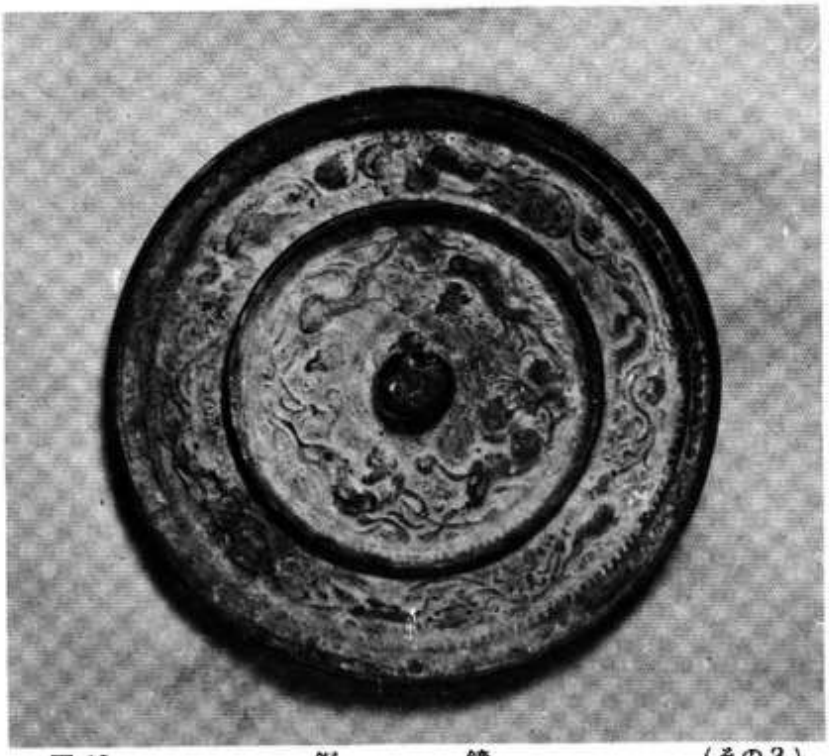

図 12　　銅　　鏡　　（その3）

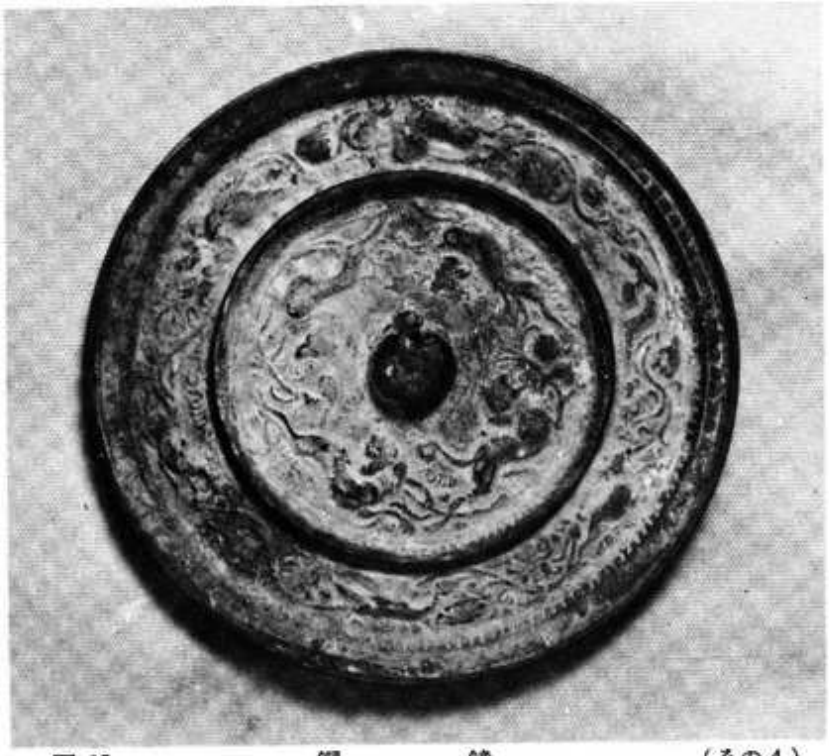

図 13　　銅　　鏡　　（その4）

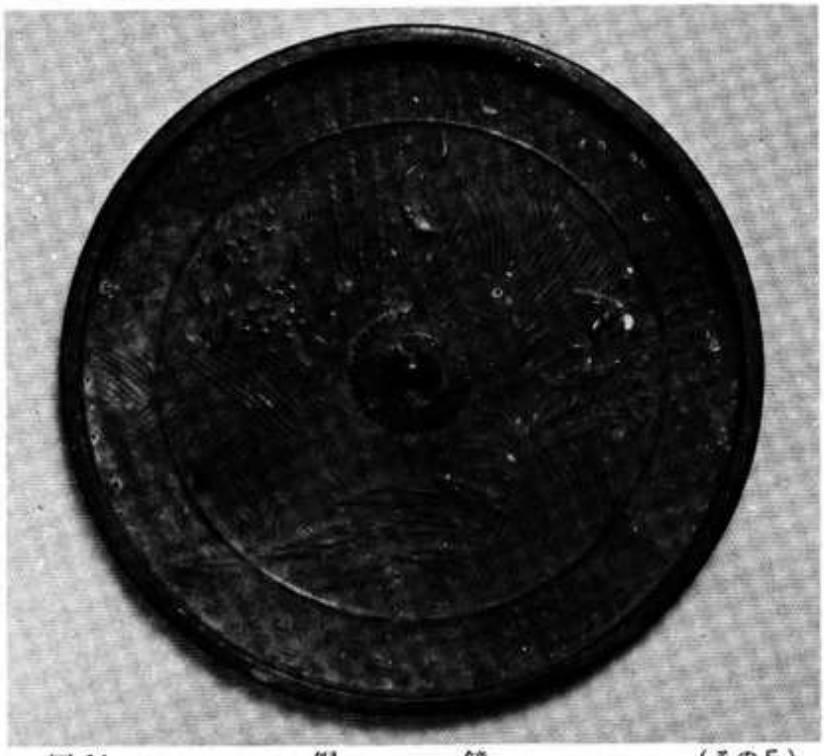

図 14　　銅　　鏡　　（その5）

図 15　　銅　　鏡　　（その6）

図 16　　銅　　鏡　　（その7）

図 17　　銅　　鏡　　（その8）

図 18　　銅　　鏡　　（その9）

図 19　　銅　　鏡　　（その10）

図 20　十根川神社本殿内宮殿
（椎葉村）

図 21　　六　地　蔵　幢

（西郷村大雄寺）

図 22　　六　地　蔵　幢

（北川村松葉観音寺）

図 23　　六　地　蔵　幢

（北浦村昌雄寺）

図 24　　六　地　蔵　幢

（延岡市常薬寺）

図 25　六　地　蔵　幢
（内藤記念館）

図 26　六　地　蔵　幢
（東郷町山陰）

図 27　六　地　蔵　幢
（延岡市熊之江）

図 28　　五　　輪　　塔

（日向市曽我の森）

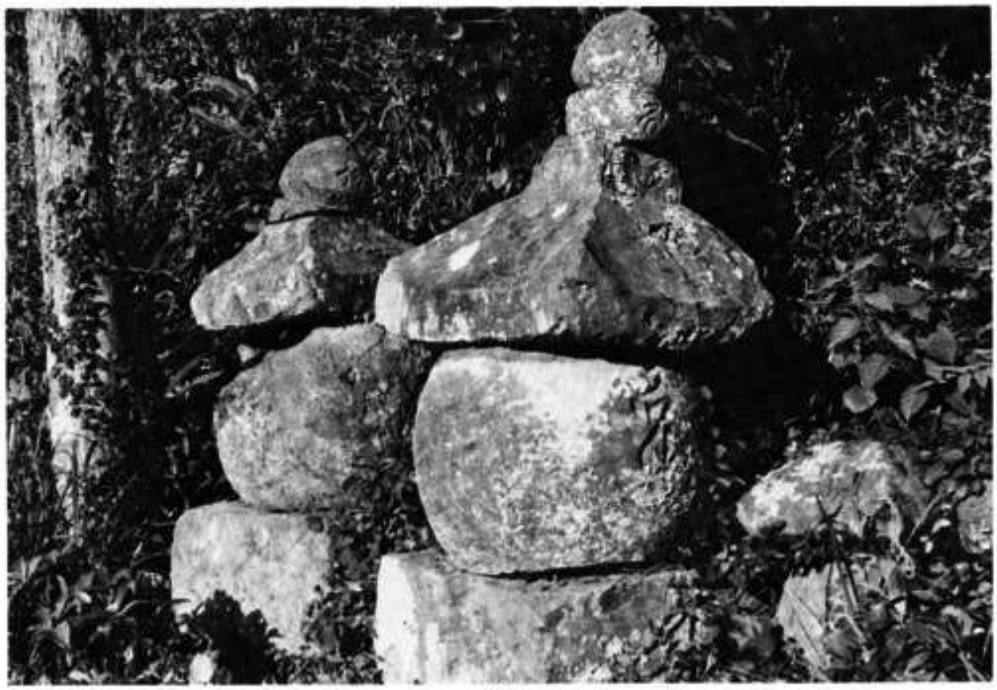

図 29　　五　　輪　　塔

（北川村　川坂）

図 30　　石　　塔　　群

（延岡市　貝ノ畑）

図 31　　石　　塔　　群

（北浦村市尾内）

第二部県南地区の文化財

昭和四十四年度調査

一、彫刻の部

文化庁・文化財調査官　田　辺　三　郎　助

宮崎県は他県にくらべて仏教関係の遺物の少ないところである。特に県南は明治初年、排仏毀釈が徹底的に行なわれたところで、見るべき仏像が皆無にちかい。なかで串間市羽瀬の永徳寺の

一、木造薬師如来立像　一躯　（図1）

は、めずらしく像高一六三、五センチの木格的な仏像で、今回調査中最大の収穫といえよう。

像は、樟材の一木造りで全身に漆箔をほどこしたもので、両足先を江戸時代に補ったほか本躰には後世の補修も少ない。両耳が大きく、耳朶が外に張っており、衣紋のあつかいも古様で、一見平安後期、十一、二世紀頃の風に見えるが、そこには一種の写しくずれが認められ、面長な相好を考え併せると、製作は鎌倉時代に入ってのものとおもわれる。おそらく十一、二世紀頃の古像があって、これを忠実に模したものであろう。ともかく製作年代の古さ、像の大きさ共にこの地方では他に比肩すべきものがなく、特筆すべきであろう。

串間市では他に、小像ながら注目すべき仏像が二、三ある。その一つは木城の広護寺の

一、木造如意輪観音坐像　一躯　（図2）

で、像高二八、九センチ、像の中心部は平安後期の製作と考えられ、江戸時代になって、これに両手と膝を補足し、漆箔をほどこして完全な姿に再興したものだが、非常に精巧な仕上げで、おそらく京都あたりから近世渡ってきたものであろう。同寺には別に鉄造と銅造の二体の

一、誕生釈迦仏像　（図3、4）

があり、これらも中世を下るものではない。

同じく串間市木代の奥村弁市氏所蔵の旧興与寺の仏像中に、室町時代の製作である

一、木造地蔵菩薩半跏像　一躯　（図5）

がある。県南にはこの時代の遺品が比較的多いが、なかでは最も良い作品である。樟材の一木造りで、惜しいことに破損がひどい。

宮崎県の彫刻としては次に仮面をあげるべきであろう。神楽面もしくは神面と称する仮面が、ほとんど県内全域でみられる。このような現象は他県では少なく、当県の文化財の特色の一に数えてよろしかろう。

今回の調査でも、えびの市西川北、黒木正人氏所蔵の

一、鬼形面　二面　（図6、7）

（各文明十一年＝一四七九銘）

都城市庄内、熊襲踊保存会所蔵の

一、仮面　八面（図8、9、10、11、12、13、14、15）

（室町時代）

都城市梅北、黒屋神社所蔵の神面三十七面（内二面天文四年＝一五三五銘、他に寛永、元録等江戸時代在銘のもの数面）、同安久、興玉神社所蔵の

一、鬼形面　二面　（図16、17）（天文十年＝一五四一銘）

串間市串間神社所蔵の

一、神楽面　十面（図18、19、20、21、22、23、24、25、26、27）

（桃山～江戸前時）等があげられる。

このうち文明十一年（一四七九）在銘の面などは、前回都城市、稲荷神社で調査した永五和年＝一三七九在銘の神面と共に仮面史上貴重な資料となろう。

石造遺物では、串間市鹿谷の

一、石造阿弥陀三尊坐像　（図28）

があげられる。これは高さ二・五メートル、巾一・二メートル程の岩壁に丸彫りにちかく彫り出されたもので、平安後期の磨崖石仏の風をうけたものだが、現在表面が傷んで、時代を明確に出来ないのが惜しい。

他に、同市永徳寺の

一、不動明王立像　（図29）

（線刻、室町初期）や、同市市木の

一、阿弥陀如来坐像　（30）

（半肉彫、弘治三年＝一五五七銘）など岩壁に刻んだ例が二、三注目された。

二、工芸品の部

文化庁・文部技官　郷　家　忠　臣

一、懸仏　二面

えびの市飯野地区上上江　熊野神社

(1) 面径一三・八糎、鏡板厚〇・九糎　（図31）

金銅板金押出製、阿部は右獅噛銀地彩色、中央に阿弥陀、右観音、左薬師の各坐像、光背は花形にして環珞付、台座には線刻を施している。裏板杉柾一枚板に、墨書で次のように記している。中央「あミだ」左「かんのおん」右「やくし」

(2) 面径一三・〇糎、厚〇・九糎　（図32）

金銅板金押出製、阿部は右獅噛銀地彩色を施し、外区円形鋲留。内区天蓋環珞を付けて花厳した阿弥陀、観音、薬師の各坐像を配している。作行、様式前者と同様、また裏面には前者と同様に墨書がある。

時代　室町時代

説明、金銅板金押出の懸仏であるこの二面は室町時代懸仏の様式、技術をあらわしたものである。このような小形で、作行必ずしも優秀ではないとはいい、当県下においては珍しい遺品ではある。

なお、当熊野神社の歴史を物語るものとして次のような銅鏡十面が遺っている。漢式鏡一面を含んでいるがこれらは鎌倉～室町時代のものが主なものでこの時期にこの小祠に対する信仰がとくに厚かったことを裏付けている。

(1) 菊花双雀鏡　径一一・三糎、花形円鈕　（図33）
(2) 菊花散双雀鏡、径一一・三糎　亀形鈕　（図34）
(3) 社頭双雀鏡　径一一・五糎　亀甲鈕　（図35）
(4) 洲浜双雀鏡　径一一・三糎　亀甲鈕　（図36）
(5) 波文双雀鏡　径一〇・七糎　亀甲鈕　（図37）
(6) 蓬萊鏡　径八・三糎　亀甲鈕　（図38）
(7) 松葉散双雀鏡　径九・四糎　亀甲鈕　（図39）
(8) 松竹双雀鏡　径一一・五糎　亀甲鈕　（図40）
(9) 菊花散双雀鏡　径九・五糎　花形円鈕　（図41）
(10) 内行花文鏡　径九・〇糎　素文円鈕　（図42）

二、紺絲威具（足兜・喉輪・籠手付）一領　（図43、44、45）

串間市　串間神社

兜鉢　高さ十六糎、左右にての幅二四糎　前後にての幅二五糎
胴廻一一二・〇糎　高さ（前にて）二五糎

兜は六十二間筋兜鉢、眉庇に双龍文を金象嵌であらわし、吹返は桜染革の上に金銅九曜紋を釘留める。

胴は引合わせの開閉の便をはかるため、左右脇を蝶番付にして五枚の鉄板を結ぶ。この弦走（前の部分）は三枚の鉄板を鋲留して、その上面に龍文を金象嵌で装飾している。

そのほかに喉輪・籠手がある。なお籠手は瓢形の打出金物が一の腕と二の腕につけた顔籠手（小円籠手）で、一の腕の上には短札形の鉄板があり、これが左右それぞれにつけ、それに銀象嵌銘を記す。右「賀州住」左「春田勝光」とあり、加賀藩抱の甲冑師、春田勝光の作であることがわかる。

江戸時代初め頃の作で、なかなかの優秀な作である。

三、建造物の部

奈良国立文化財研究所
建造物研究室長　伊藤延男

「木造建造物」

宮崎県は木造の古い建造物のきわめて乏しいところである。今回調査した範囲でも、室町時代以前に遡る遺構はついに発見されなかった。しかし、宮崎県では、江戸時代になっても、いわゆる江戸風の様式はなかなか成立せず、ために室町時代の様式がずっと後まで残っている。したがってわれわれは、江戸時代のものから、中世の建築のありさまを窺うことができるのである。

以上のような意味で第一に注目されるのは

都城市安久の

一、興玉神社本殿内宮殿　一棟（図46、47）

である。この宮殿は、旧棟木に銘があって、応永六年（一三九九）に薬師如来をまつる厨子として造られたことがわかる。この棟木自体はたしかに応永のものと推定されるが、しかし残念ながら、他の部分はすべてのちの時代に造りかえられたものらしい。造りかえた時期はよく分らないが、江戸時代と思われる。

しかし造りかえられた部分は、もとの形態をきわめて忠実に模倣しているものである。

次にえびの市上上江の

一、熊野神社本殿内宮殿　一棟　（図48）

は、江戸時代中期の作とみられるが、やはり室町様式の濃く残っているものである。さらに、都城市岳之下の

一、兼喜神社本殿内宮殿　一棟　（図49）

も、江戸時代中期であろうが、その様式は桃山時代かと思われるほど古い。

なお、民家については、数棟の調査を行なったが、いずれもあまり年代の古いものではなく、また現存状態がよくなかった。

「石造物」

石造物でもっとも注目されたのは串間市のものである。まず、串間市鹿谷の

一五輪塔　一基　（図50）

は、自然石から彫み出した一石五輪塔であって、その形式はきわめて古く、平安時代末期の名残をみせている。おそらく室町時代頃古い様式を模して造られたものであろう。

串間市西方の

一、五輪塔　二基　（図51、52）

は、いずれも下半分しか残っていないが、幅九〇センチの大型五輪塔で、室町時代初期のものと推定される。県内では特に大規模なものであり、年代も相当に古いから、由緒あるものであろう。同じく串間市北方大田井　極楽寺境内墓地の

一、五輪塔群　（図53）

は、十基以上を残している点で注目されるが、その一に天正六年（一五七八）の銘があって、この時代の作風を示す基準となっている。また他の二基は明らかにこれよりも古い様式をもっているから、室町時代のものであろう。

次に、山之口町花木の前方部落にある

一、五輪塔　一基　（図54）

は、俗称〝復切どん〟といわれ、南北朝時代の武将にからむ伝説を

もつが、塔そのものは、室町時代中期らしい。しかし規模も大きくて注目に価するものであった。

なお、今回の調査範囲には、六地蔵幢がいくつかあった。しかし県北にくらべるとその数が少なく、しかも古いものに乏しくかつ残存状態がよくなかった。

「その他の建築資料」

一、東大寺大仏殿瓦木型　（図55）

串間市本城　長谷川ハルエ氏所蔵

奈良の瓦屋石井氏が、江戸時代東大寺大仏殿の瓦を製作するにあたり用いたといわれる木型である。石井氏は、明治以後同地にきたり、やはり瓦屋を営んでいたという。

全国的に見てたいへん興味ある遺品である。

県南地区の文化財（図版）

図 1　　木造薬師如来立像

（中間市永徳寺蔵）

図 2　　木造如意輪観音坐像

（串間市広護寺蔵）

図 4　（銅　造）

図 3　（鉄　造）

誕　生　釈　迦　仏

（串間市広護寺蔵）

図 5　　木造地蔵菩薩半跏像

（串間市奥村善市氏蔵）

図 6　（阿　形）

図 7　（吽　形）

鬼　形　面

（えびの市　黒木純夫氏蔵）

図 8　仮　面　（その1）

（都城市熊襲踊保存会蔵）

図 9　仮　面　（その2）

図 10　仮　面　（その3）

図 11　仮　面　（その4）

図 12　仮　面　（その5）

図 13　仮　面　（その6）

図 14　　仮　　面　　（その7）

図 15　　仮　　面　　（その8）

図 16　（阿　形）

図 17　（吽　形）

鬼　形　面

（都城市興玉神社蔵）

図 18　神　楽　面　（その1）

（串間市　串間神社蔵）

図 19　神　楽　面　（その2）

図 20　神　楽　面　（その3）

図 21　神　楽　面　（その4）

図 22　神　楽　面　（その5）

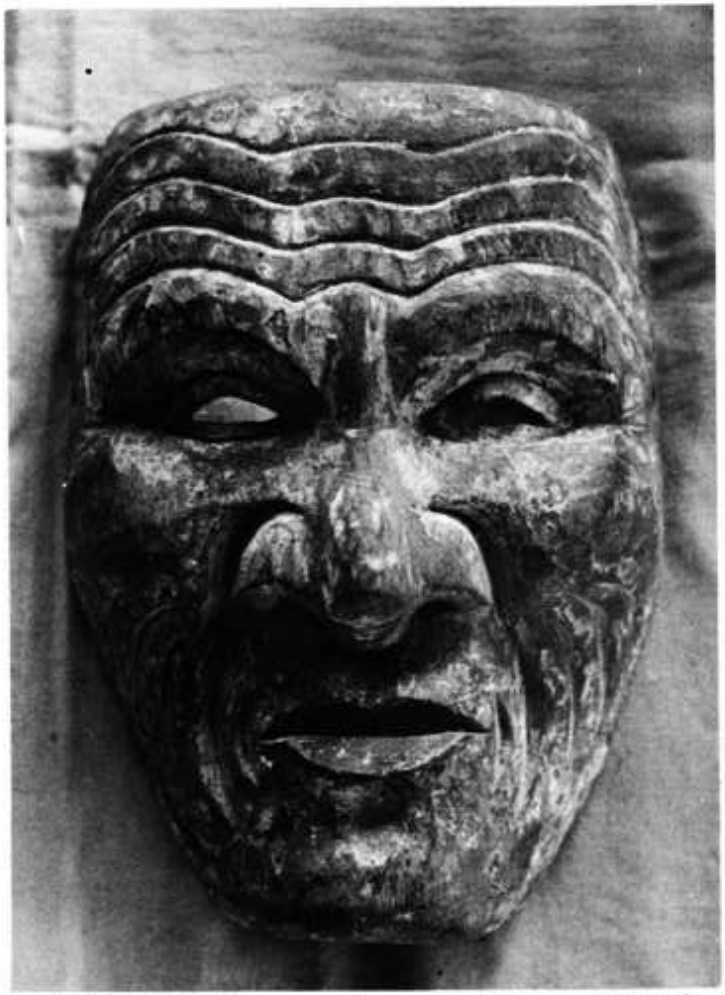

図 23　神　楽　面　（その6）

図 24　神　楽　面　（その7）

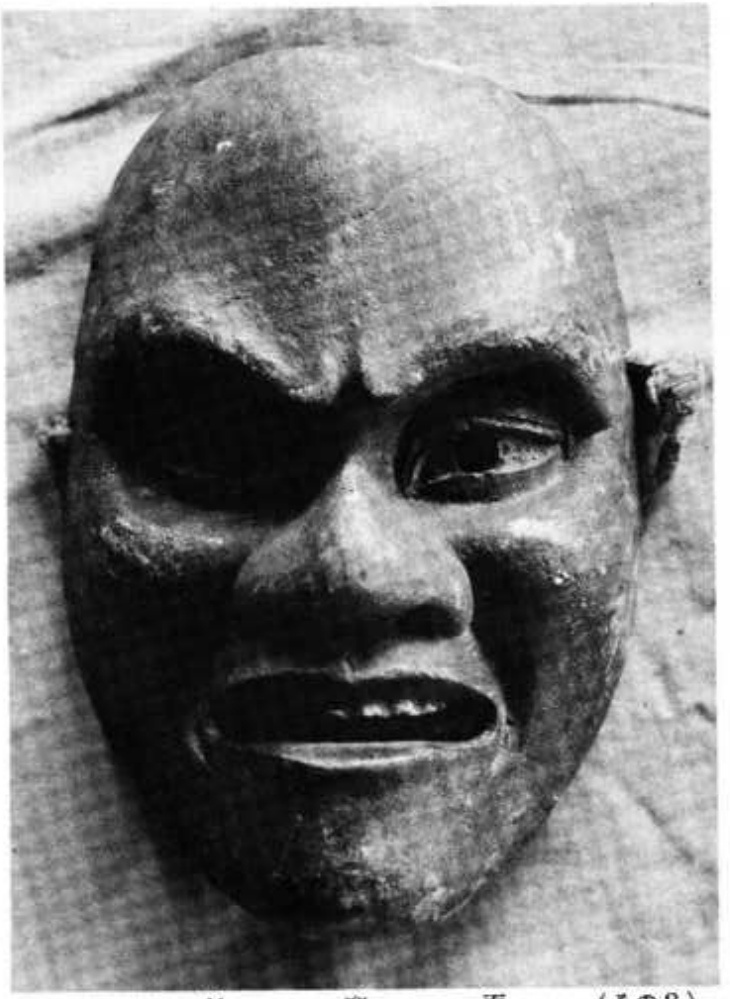

図 25　神　楽　面　（その8）

図 26　神　楽　面　（その9）

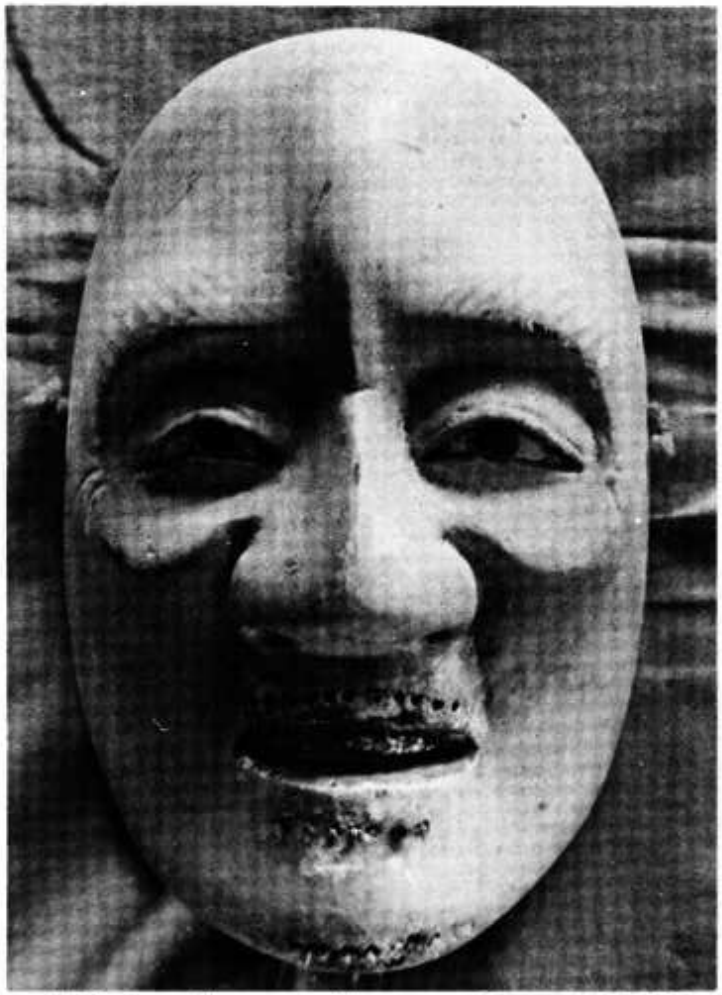

図 27　神　楽　面　（その10）

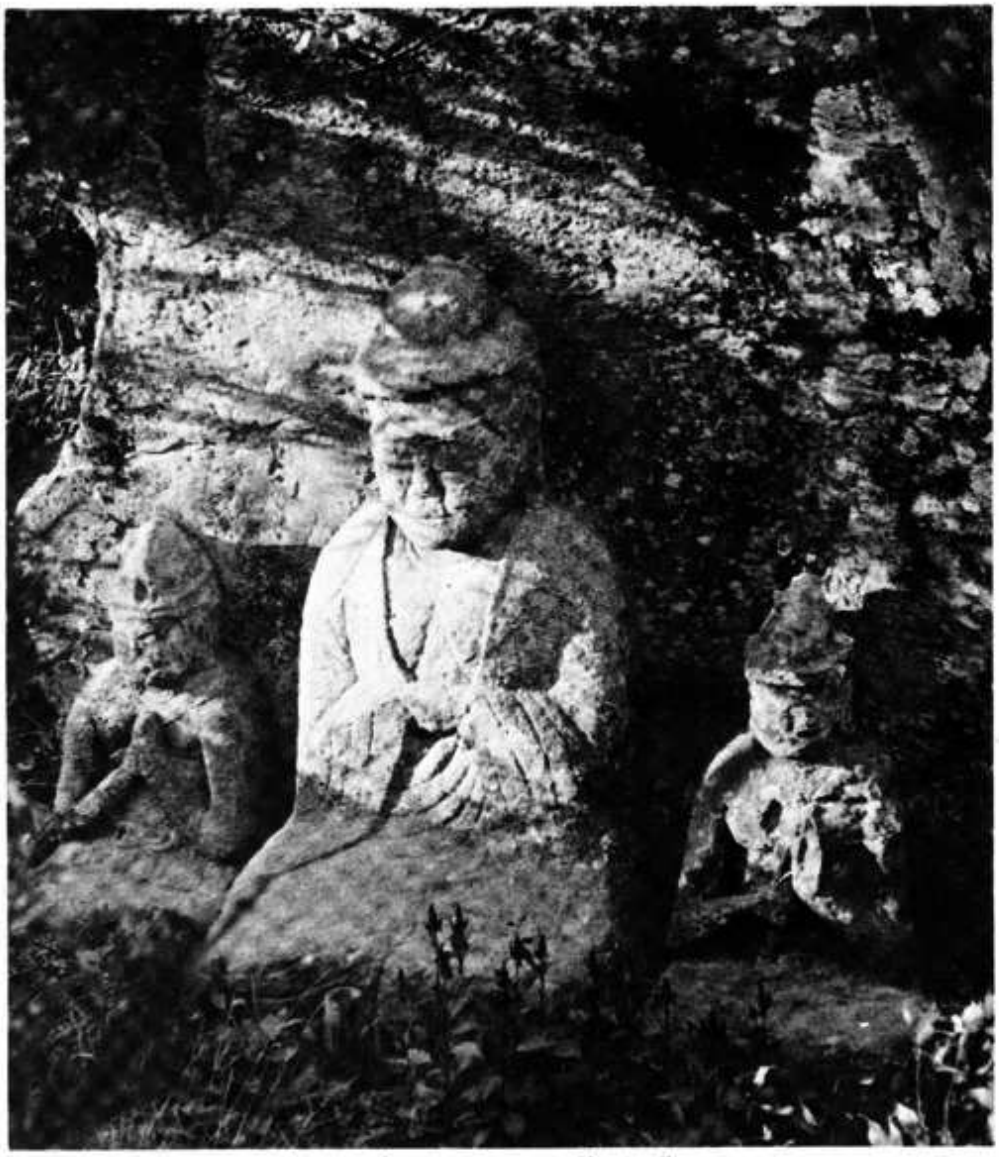

図 28　　石造阿弥陀三尊坐像

（串間市鹿谷部落）

図 29　不動明王立像
（串間市永徳寺）

図 30　阿弥陀如来坐像
（串間市市木）

図 31　　懸　　仏（えびの市　熊野神社蔵）　（その1）

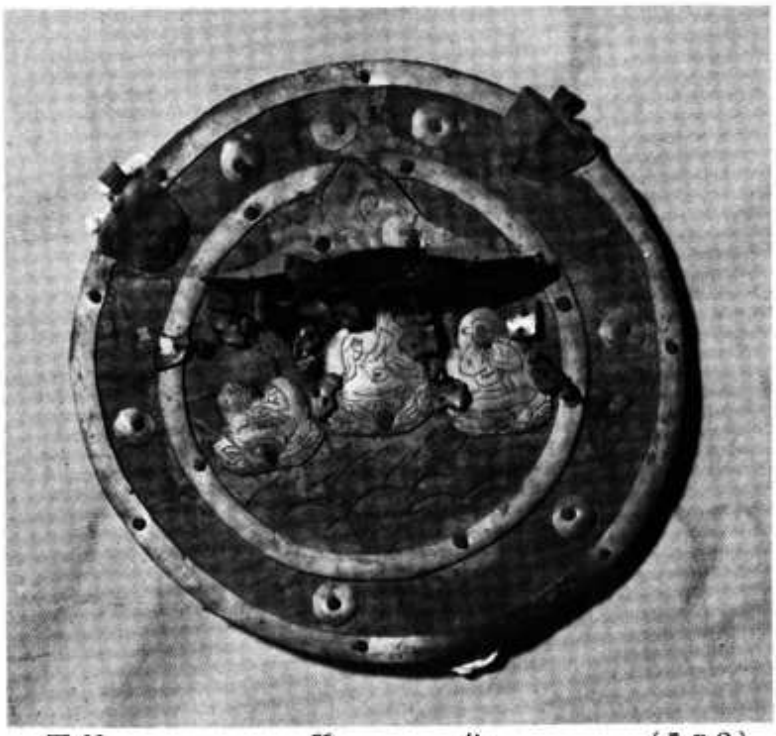

図 32　　懸　　仏　　（その2）

図 33　　銅　　鏡（えびの市　熊野神社蔵）　（その1）

図 34　　銅　　鏡　　（その2）

図 35　　銅　　鏡　　（その３）　　図 36

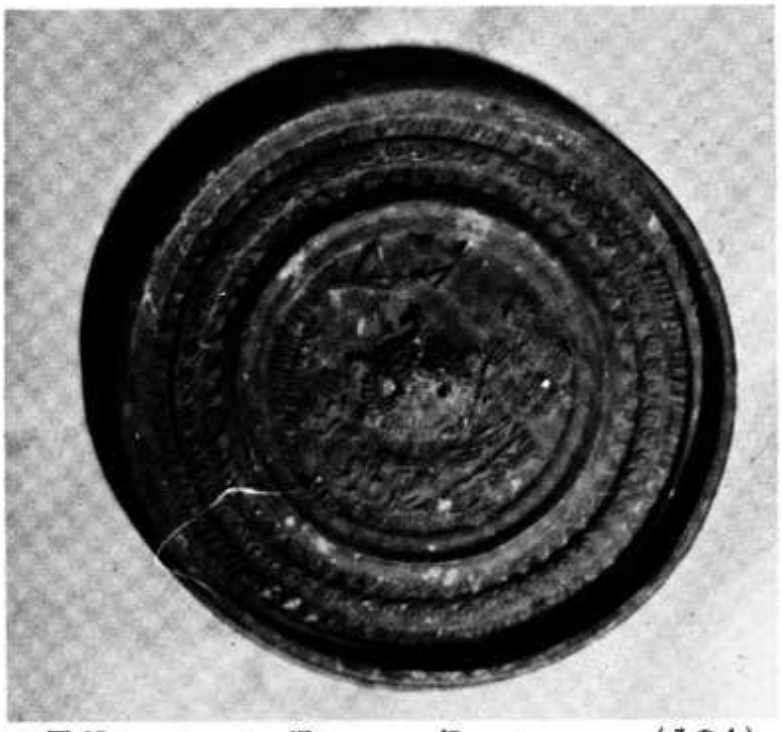

図 37　　銅　　鏡　　（その4）

図 38　　銅　　鏡　　（その5）

図 39　　銅　　鏡　　（その6）

図 40　　銅　　鏡　　（その7）

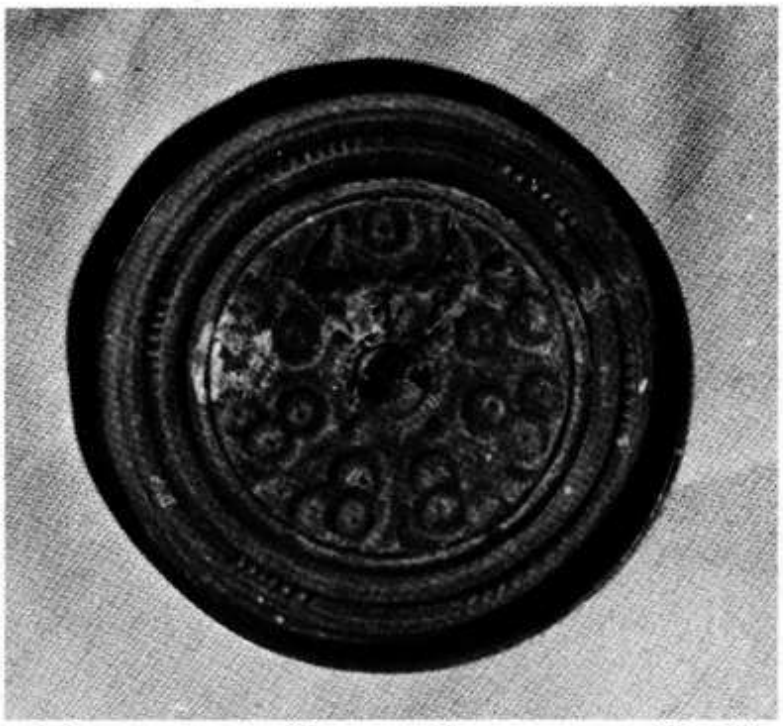

図 41　　銅　　鏡　　（その8）

図 42　　銅　　鏡　　（その9）

図 43　　紺　絲　威　具　足　　（その1）

（串間市　串間神社）

図 44　　紺　絲　威　具　足　　（その2）

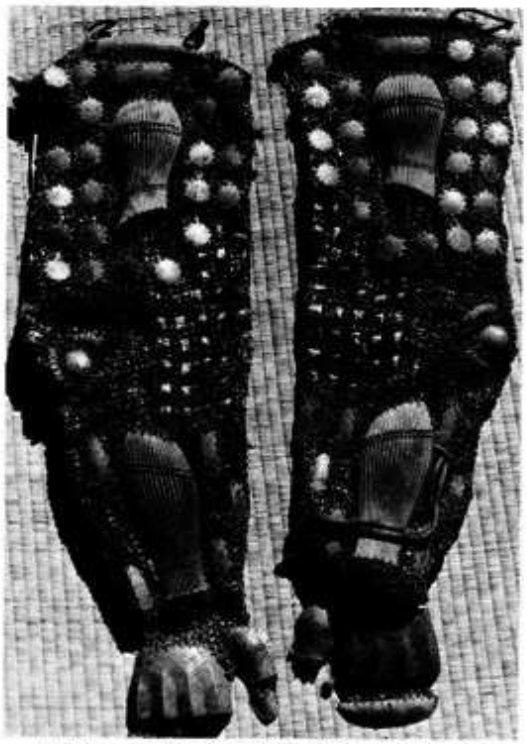

図 45　紺絲威具足　（その3）

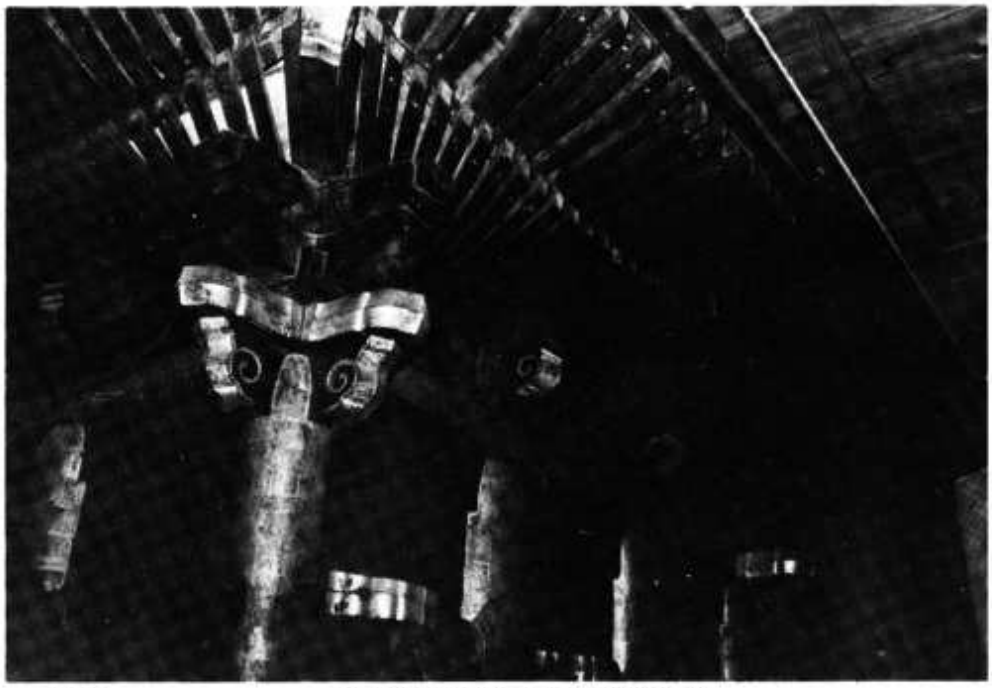

図 46　　興玉神社本殿内宮殿（都城市）

同旧棟木

図 47

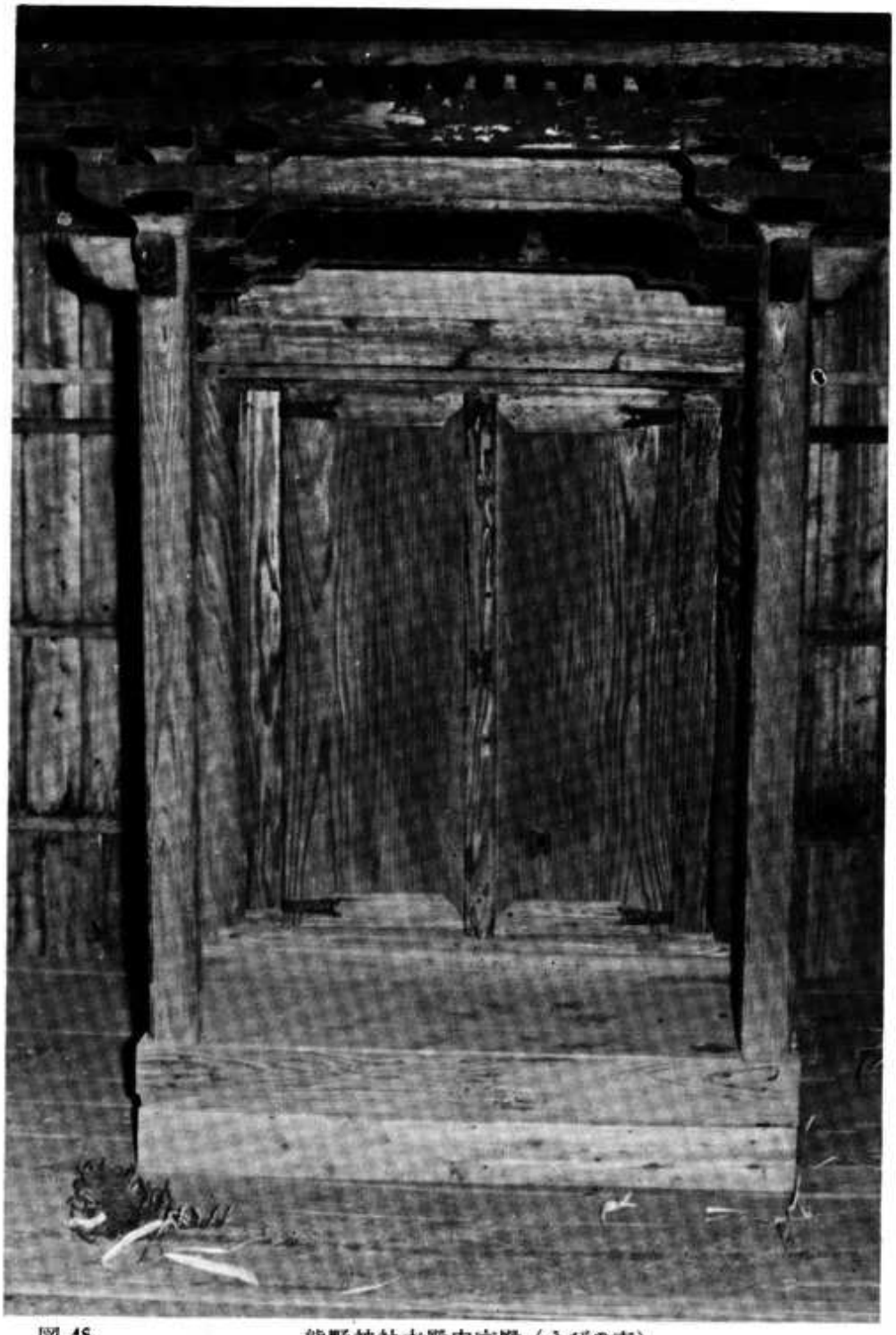

図 46　　熊野神社本殿内宮殿（えびの市）

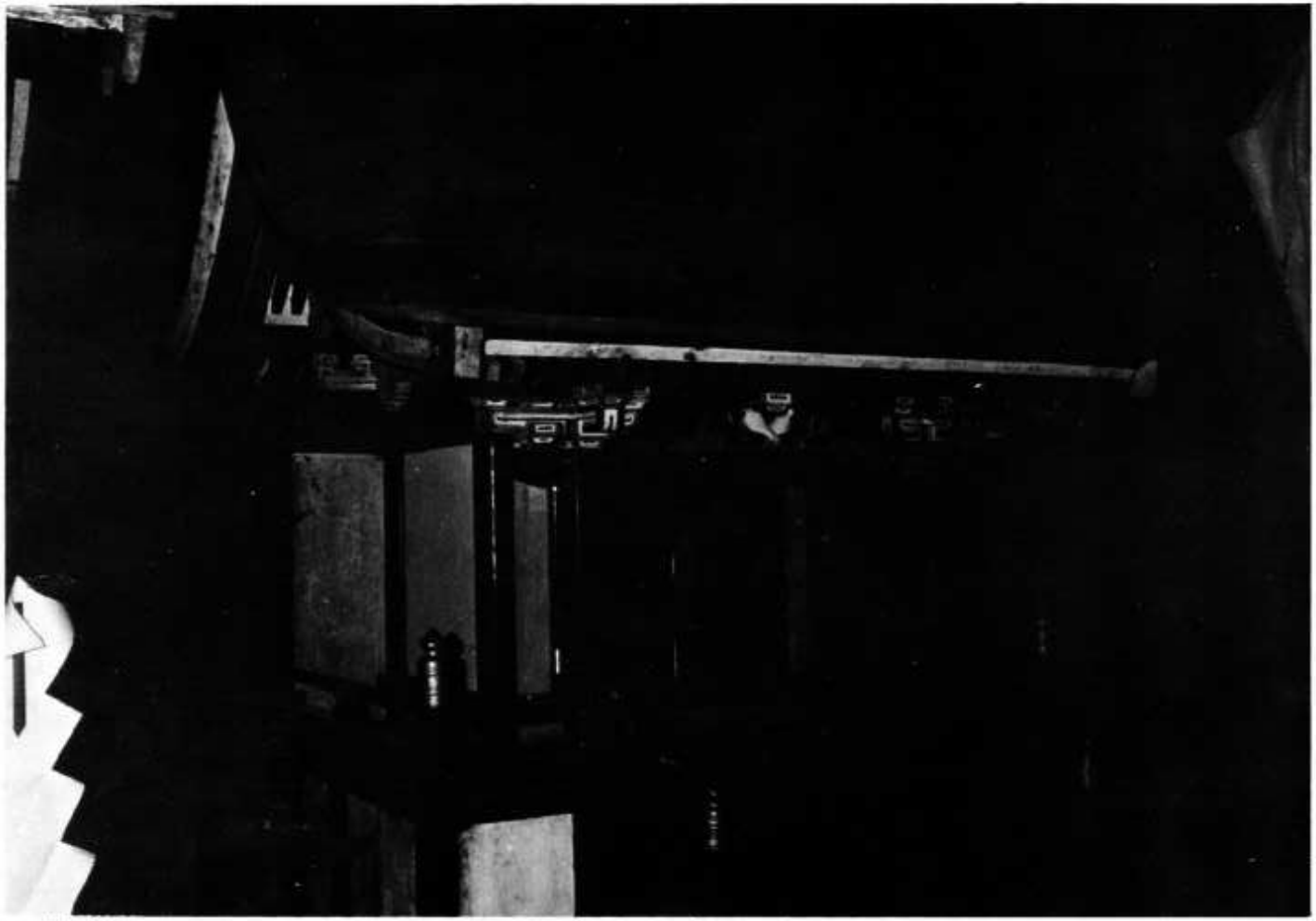

図 49　　兼喜神社本殿内宮殿
（都城市）

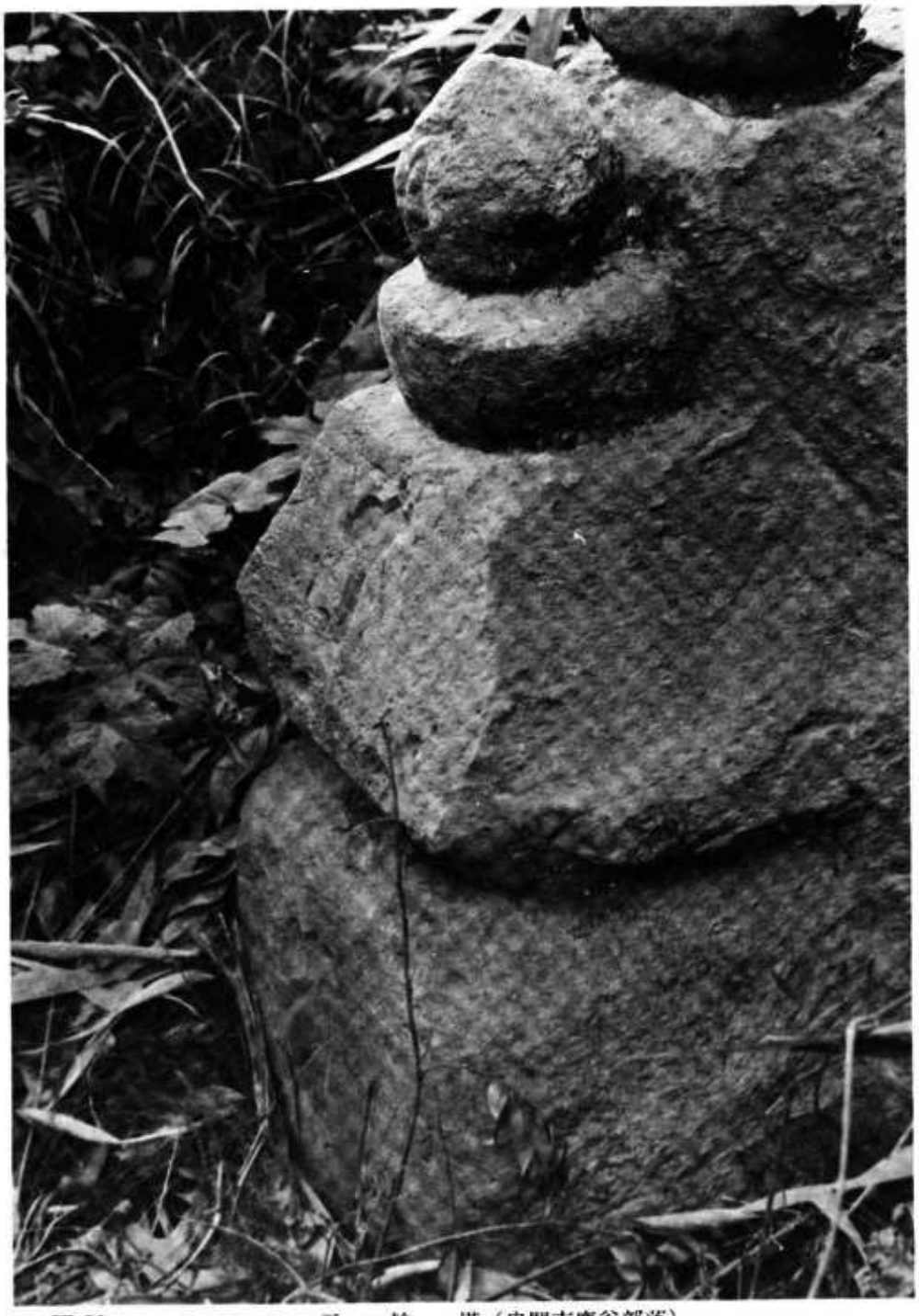

図 50　　五　輪　塔（中間市鹿谷部落）

図 51　　五　輪　塔 (1)

（串間市西方部落）

図 52　　左 に 同 じ (2)

図 53　　五　輪　塔　群

（串間市極楽寺）

五　輪　塔

（山之口町前方部落）

図 54

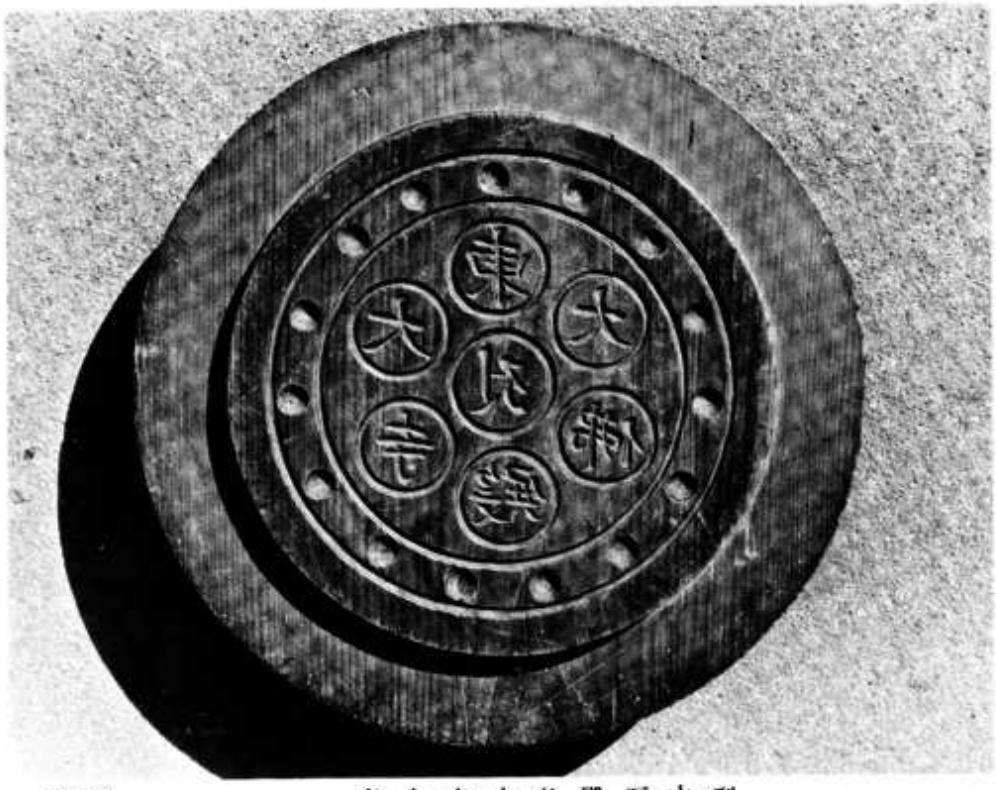

図 55　　東大寺大仏殿瓦木型

（串間市　長谷川ハルエ氏蔵）

第三部 県中地区の文化財

昭和四十五年度調査

一、彫刻の部

文化庁・文化財調査官　田　辺　三　郎　助

今回の調査では、平安後期以降の各時代にわたる仏教彫刻が一応出揃い、仮面資料として貴重な遺品を調査し得たことが特筆される。その意味では、やはり県中部が最も収獲が多かったといえよう。

以下主な調査対象を略記する。

一、木造阿弥陀如来坐像　一躯　（図1）

綾　町　　川中神社

像高八〇・五センチ、平安時代後期

桧一木造りで、おそらく背面を矧いで内刳りを施すものと思われ、膝前、両手先等は型の如く矧付ける。髪際が広く、いかつい感じの面相で衣褶の彫りも荒いが、細目の螺髪を刻みつけ、整った体躯、整理された衣文など見ると製作は平安後期になると考えられる。当地方での平安古像として注目すべきものであろう。光背裏面に文亀三年（一五〇三）の銘があり、現在の二重円光、蓮花七重座はこの時の補作と考えられるが、これらも室町時代の台座、光背の一典型となりうるものである。

一、木造阿弥陀如来立像　一躯　（図2）

綾　町　　仏像寺跡仏堂

像高九六センチ、平安後期―鎌倉初期

両手先を失っているがこの頃に数の多い、いわゆる三尺像の来迎弥陀立像と考えられる。頸部などの矧目が損傷し、現状はみるかげもないありさまだが、やさしく整った面相などなかなか出来のよい像であったと思われる。早急に修理、保存の途を講ずべきであろう。

一、木造十一面観音立像　一躯　（図3）

高鍋町　坂本清氏蔵

像高七五・五センチ　鎌倉後期

髻・頭上面等を失っているが、十一面観音であった痕跡がある。面相や衣のひだの表現などに、鎌倉の写実的な風が顕著で、しかもなかなか出来のよい像である。この地方の鎌倉仏中、重要文化財指定の三件に次ぐものだが傷みがひどいのが惜しい。

一、木造阿弥陀如来立像　一躯　（図4）

新富町　　蔵島神社

像高七五・八センチ、鎌倉末―南北朝時代

これも彩色、両眼、台座、光背等を補修して見かけはよくないが、この時代の典型的な弥陀立像で、補修すれば面目を一新するであろう。

一、木造阿弥陀三尊立像　三躯　（図5・6・7）

佐土原町　　堤公民館

像高　中尊七九・〇　左脇侍六一・三　右脇侍五六・〇センチ

鎌倉末―南北朝時代

いわゆる来迎相の弥陀三尊で、やはりこの頃の特色顕著な作例である。いずれも傷みがひどいが、一応三尊が揃っているのは貴重である。

一、銅造阿弥陀三尊立像　三躯　（図8・9）

西都市　　城宝寺

像高　中尊四七・五　左脇侍　三〇・三　右脇侍三〇・六センチ

鎌倉末―南北朝時代

いわゆる善光寺式の銅造三尊で、このような作例は全国に発見さ

れ、現在百六十件程を数えることが出来るが、この作品はおそらくその南限といえるだろう。県下には国宝町の護門寺にもあるが、そちらのは三尊揃っていない。この種のものとしては必ずしも出来のよい方ではないが、文化史的には貴重な遺品といえる。

一、石造寒山拾得像　二躯　（図10・11）

高鍋町　　舞鶴城趾

全高　寒山九五・〇　拾得九六・三センチ、室町時代

各一石の表面を平たにけずり、そこに像を薄肉に刻んだもので、裏面に天文十八年（一五四九）の銘を刻んでいる。もと串間にあり、秋月藩が当地に移したと伝えるがめずらしい石造遺品である。

一、木造六観音像　六躯　（図12・13・14・15・16・17）

像高三四・三～三六・五センチ、室町時代

像の頭部内面や台座に永禄六年（一五六三）奈良、宿院仏師源次他の墨書銘があり、当時奈良地方を中心に活躍していた著名な仏師集団の作であることがわかる。同寺の弘法大師像（像高八二センチ）も同じ作であり、奈良地方にも同じ作者の遺品が知られている。資料的に興味深いもので、また作例の少ない六観音の遺品としても尊重すべきであろう。

一、木造千手観音立像　一躯　（図18）

佐土原町　　平等寺

高一二一・五センチ、江戸時代

装飾的な髪毛や衣裳のあつかいなどに鎌倉後期の風を残した江戸時代の作品で、当時としては入念な出来のよいものである。江戸期の仏像は全国的に数が多く、当地方でもかなり見て来たが、なかでは推賞しうる一作といえよう。

一、木造舞楽面（陵王）　一面　（図19）

宮崎市　　新名爪八幡神社

縦二八・一（髭を除く）センチ、室町時代

舞楽面は平安、鎌倉時代に盛行した舞楽に用いる面で、その遺品は近世までを含めると全国に散在している。本面はおそらくその南限と思われ、文化史的に意義のある遺品である。作としてはかなりくずれたもので、室町期も早いものではあるまい。おそらく豊後宇佐神宮との関係において存在するのであろう。なお、本社には同じ頃の作かと考えられる獅子頭も一面伝わっている。

一、木造能面（癋見（べしみ））　一面　（図20）

国宝町　　井口渡氏蔵

縦二五・五センチ、室町時代

両眼を見開き、口をへしめた大ぶりの面で、桂材の荒い彫り口のもので、おそらく能面の癋見の祖型を示す遺品と考えられる。裏に嘉吉四年（一四四四）、伊勢太神宮に寄進した旨の刻銘があり、能楽大成以前の能面を考える上に貴重な資料である。

一、木造神面（阿形・吽形）　二面　（図21・22）

佐土原町　　巨田八幡神社

縦阿形二四・八　吽形二五・三センチ、桃山時代

室町時代の社殿として貴重な本殿（建築の項参照）の正面の柱にかけてあった一対の奉納鬼面で、各々の裏に墨書銘があり、慶長十八年（一六一三）に寄進されたことがわかる。この種神面としては特に古いものではないが、出来によい方でしかも当初の奉納状態を偲ばせることは貴重である。

（以　上）

二、工芸品の部

文化庁・文部技官　郷　家　忠　臣

一、鋼　鏡　十一面

佐土原町大字上田島　　巨田神社

(一) 菊花双雀鏡　径一〇・三糎　花文鈕　(図23)
(二) 菊花尾長鏡　径一〇・四糎　花文鈕　(図24)
(三) 菊花散双雀七曜紋鏡　径一一・六糎　花文鈕　(図25)
(四) 社頭双雀鏡　径一一・二糎　亀甲鈕　(図26)
(五) 浮線綾文鏡　径一一・〇糎　亀甲鈕　(図27)
(六) 菊花双雀鏡　径一〇・四糎　亀甲鈕　(図28)
(七) 菊桐花散鏡　径一〇・三糎　亀甲鈕　(図29)
(八) 洲浜松竹双鶴鏡　径一一・三糎　亀甲鈕　(図30)

以上室町時代の作

(九) 洲浜松竹双鶴鏡　径一一・三糎　亀甲鈕　(図31)
(十) 洲浜松竹双鶴鏡　径一二・二糎　亀甲鈕、桃山時代　(図32)
(十一) 洲浜松竹双鶴鏡　径一〇・二糎　亀甲鈕「天下一清水河内守」鋳銘、江戸時代　(図33)

説明、本殿は室町期のものであるが、これら奉納鏡はそれを裏付ける資料として貴重である。

二、甲　冑

1　兜鉢残闕　一領分（一箱）　浜砂淳氏蔵

西都市銀鏡　八幡座金径六・〇糎　(図34・35・36)

浜砂氏宅、大王塚と称せられている場所より出土したもので、伝承によれば南朝系の親王が着用していたものという。

この伝承を裏付けるごとく、鎌倉時代の兜鉢らしい。小札の様式、八幡座および筋や鋲の大きいことはその時代の様相を示している。

現在腐蝕著しく、その完全な形は知るよしもないのは残念である。

三、染　織　品

(1) 小袖残闕　一領分　(図37)

宮崎市下北方町五一四二　金丸茂一氏蔵

現状は襟、袵、袖、身頃などの縫糸がとれていて分離したままである。このような裂状ながら、鳳凰菊唐文を肩裾に色糸にて縫箔の技術で装飾した小袖一領分の裂である。桃山時代から江戸初期までを降らない縫箔であるが、その袖も小さく、当時服装の面影を伝えているがいかんせん、小袖として完好の衣裳で残っていないのが残念である。

(2) 格子模様肩衣　一領分（図38・39）

高岡町花見　花見神社

紺、黄の絹絲で格子模様に織った肩衣で、背裏麻布地に次のような墨書がしるされている。

寛政七歳卯
奉奇進大神宮祇園大正軍
十一月十一日　高岡花見村　中馬主右衛門

これは狂言装束であって、当社には次の着物が遺っている。

木綿紺地立涌蝶葵文肩衣　一領
繻子地獅子雲宝盡文肩衣　一領
茶地四菱文野袴　一腰

三、建造物の部

奈良国立文化財研究所
建造物研究所室長　伊藤延男

概要　今回の調査においては、木造建造物において見るべきものがあった。これが第一の収獲であって、佐土原町の巨田神社本殿、綾町の川中神社本殿等がそれである。また機を見て拝見した住宅でも、年代の明らかな例を二、三発見することができて、将来の民家調査に対する基準を求めることができた。

石造物では、まず宮崎市の宝泉寺墓地において、鎌倉時代の板碑二基を調査したほか、かなり多くの六地蔵幢を見ることができた。

そのうちでは、国富町の宝光寺のものが比較的保存がよかったが、一般的には断片的となっていたものが多い。

「木造建造物」

一、巨田（こた）神社本殿　一棟　（図40・41）

佐土原町　上田島

三間社流造の社殿、昭和三十六年屋根葺替に当り、天文十九年（一五五〇）の棟札が発見された。様式も室町末期でありそ間はない。本県下では、室町時代建立のまま伝わる唯一の遺構である。ただし、向拝部分は桃山時代頃の大改造を受けている。おそらく島津氏統治になって意識的に改めたのであろう。

一、川中神社本殿（旧阿弥陀堂）　一棟　（図42）

綾町川中

実年代は近世初期であるが、室町時代の様式をもつ仏堂建築である。

一、元山矢村神社本殿　一棟　（図43）

西米良村　上米良

村所の八幡神社本殿を移したもの、江戸時代中期のものだが、簓股その他に永禄二年（一五五九）の古材を残している。

一、産土（うぶすな）神社本殿　一棟　（図44）

西米良村　横野

慶安五年（一六五二）と年代は明らかだが、簡素な建物である。

「石造物」

一、板碑　二基　（図45・46）

宮崎市城ケ崎　宝泉寺墓地内

一基は鎌倉時代嘉暦三年（一三二八）銘があり、他は無銘であるやはり同時代と思われる。その他にも調査すれば新発見があろう。が、この墓地は目下区画整理が行なわれている。これらの古い石造物に何等かの保存措置が加えられることが望まれる。

一、六地蔵幢　二基　（図47・48）

宮崎市　長久寺

桃山ないし江戸初期。

一、六地蔵幢　二基　（図49・50）

宮崎市　伊満福寺

一基は永正十八年（一五二一）銘だが竿だけ、一基は桃山。

一、六地蔵幢　一基　（図51）

国富町　宝光寺

永禄九年（一五六六）銘、ほぼそろっている。

一、十三仏石碑　一基　（図52）

高鍋町　家床部落

永禄五年（一五六二）銘、よく保存されている。

県中地区の文化財

（図版）

図 1　　木造阿弥陀如来坐像

（綾町　川中神社蔵）

図 2　木造如来立像
（綾町　佛像寺趾仏堂蔵）

図 3　木造十一面観音立像
（高鍋町　坂本清氏蔵）

図 4　木造阿弥陀如来立像
（新富町　厳島神社蔵）

図 5　木造阿弥陀三尊立像（中尊）
（佐土原町　堤公民館）

図 6　木造阿弥陀三尊立像（右脇侍）
（佐土原町　堤公民館蔵）

図 7　右に同じ（左脇侍）

図 8　銅造阿弥陀三尊立像（中尊）
（西都市　城宝寺）

図 9　右に同じ（脇侍）

図 10

図 11

石造寒山拾得像

（高鍋町　舞鶴城跡）

図 12　木造六観音坐像（その1）
（宮崎市　長久寺蔵）

図 13　　左に同じ　（その2）

図 14　　木造六観音坐像　（その3）

図 15　　左に同じ　（その4）

図 16　木造六観音坐像　（その5）

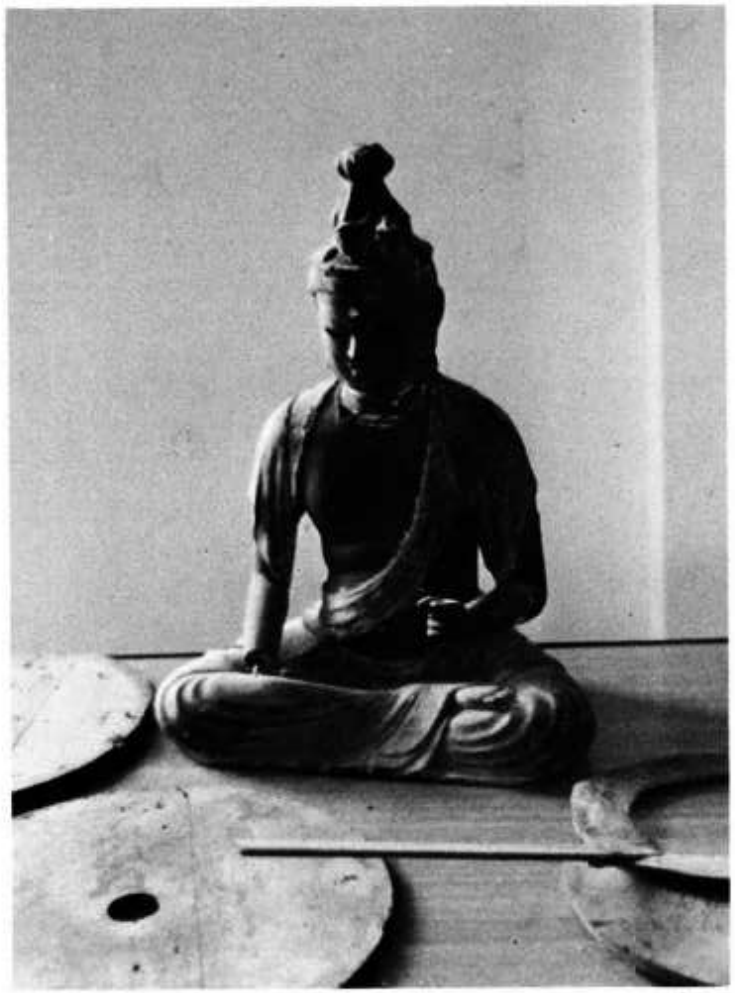

図 17　左に同じ　（その6）

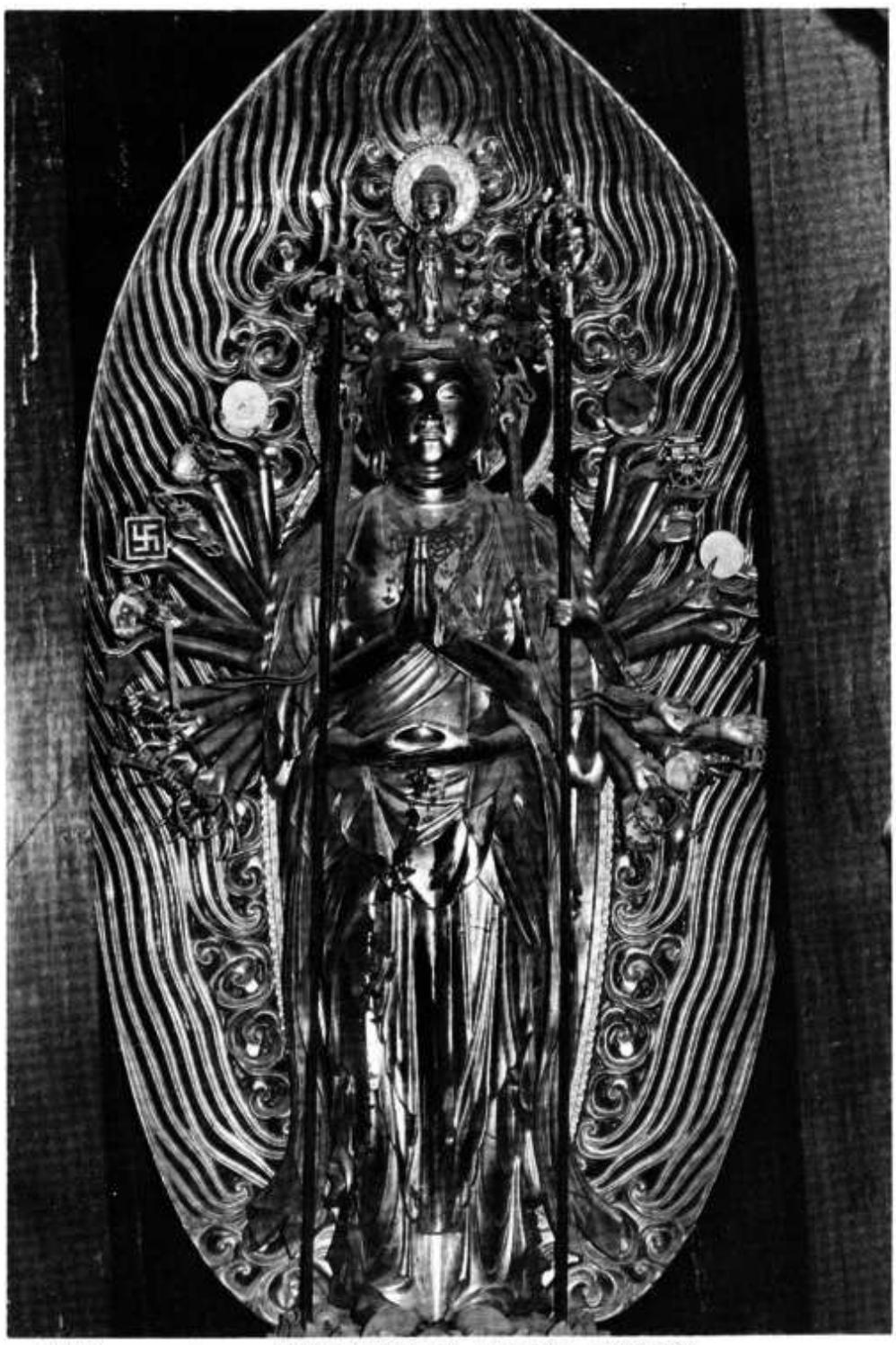

図 18　　木造千手観音立像（佐土原町　平等寺蔵）

図 19　　木造舞楽面（陵王）（宮崎市新名爪八幡神社蔵）

図 20　　木　造　能　面（瘤見）

（国富町　井口渡氏蔵）

図 21　（吽　形）

図 22　（阿　形）

木　造　神　面

（佐土原町　巨田八幡神社蔵）

図 23　　銅　　鏡（佐土原町　巨田八幡神社蔵）（その１）

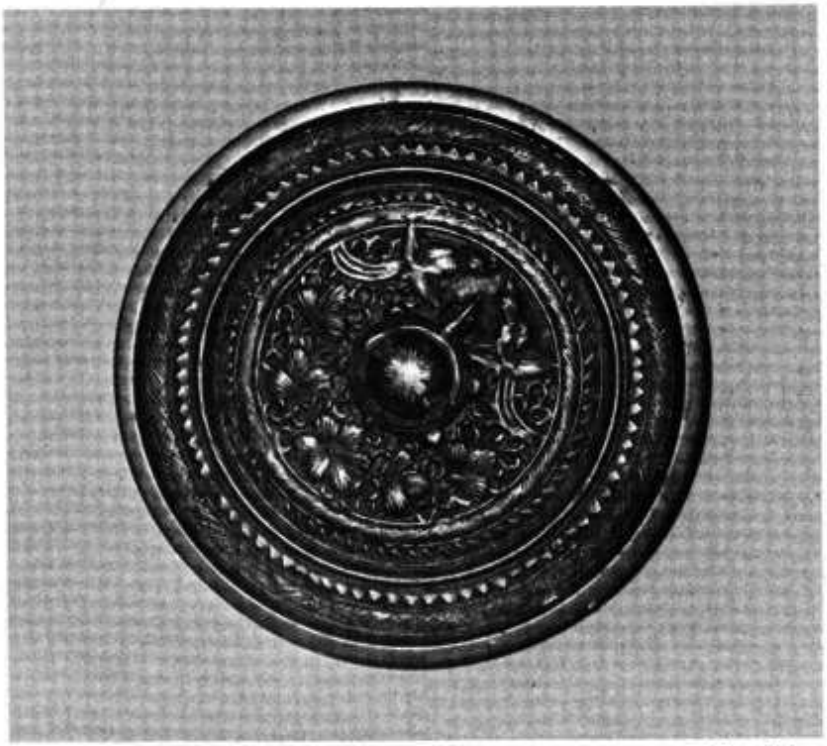

図 24　　銅　　鏡　　（その２）

図 25　　銅　　鏡　　（その3）

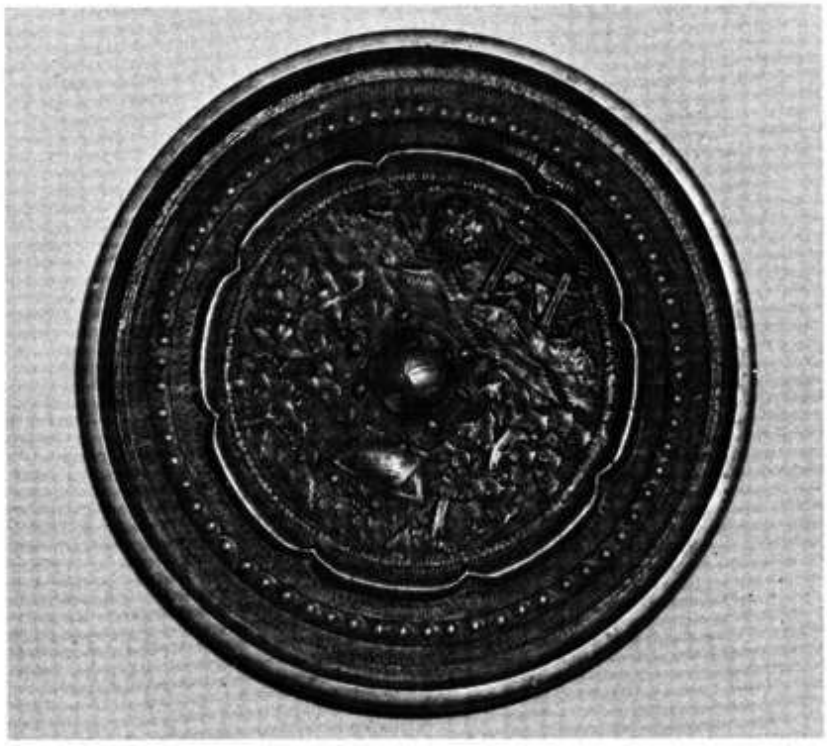

図 26　　銅　　鏡　　（その4）

図 27　　銅　　鏡　　（その5）

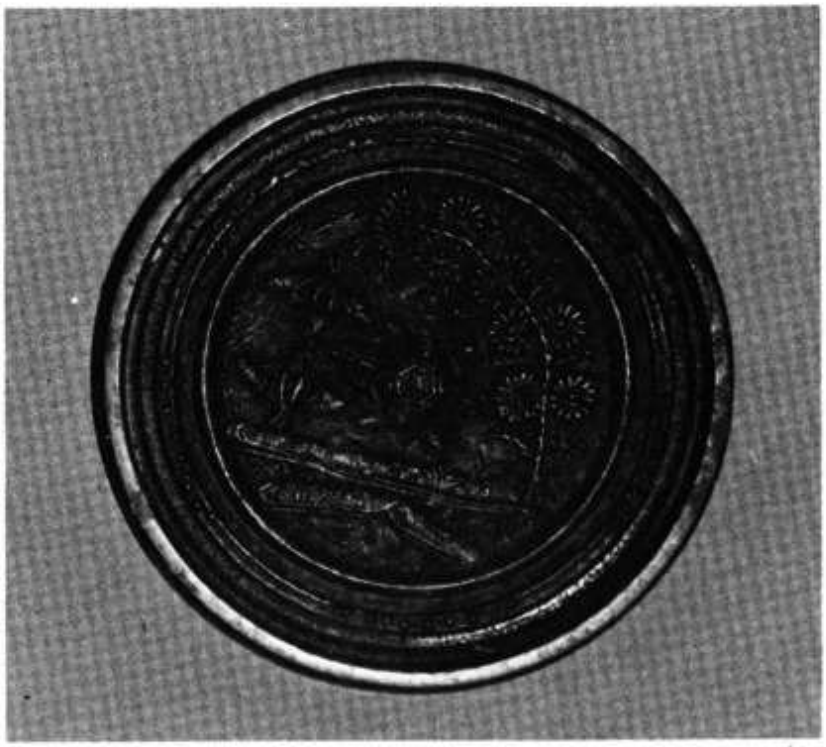

図 28　　銅　　鏡　　（その6）

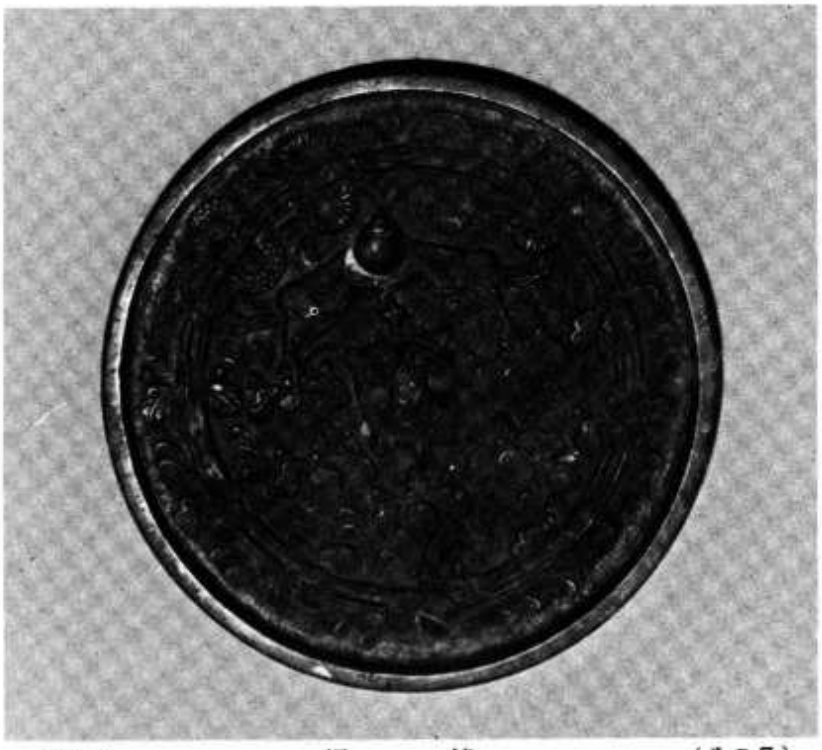

図 29　　銅　　鏡　　（その7）

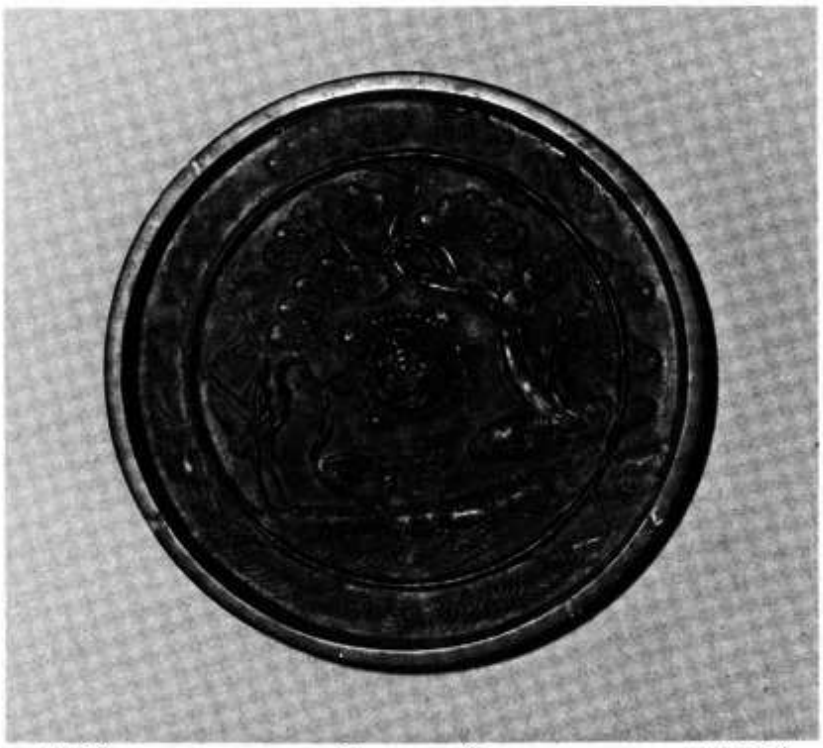

図 30　　銅　　鏡　　（その8）

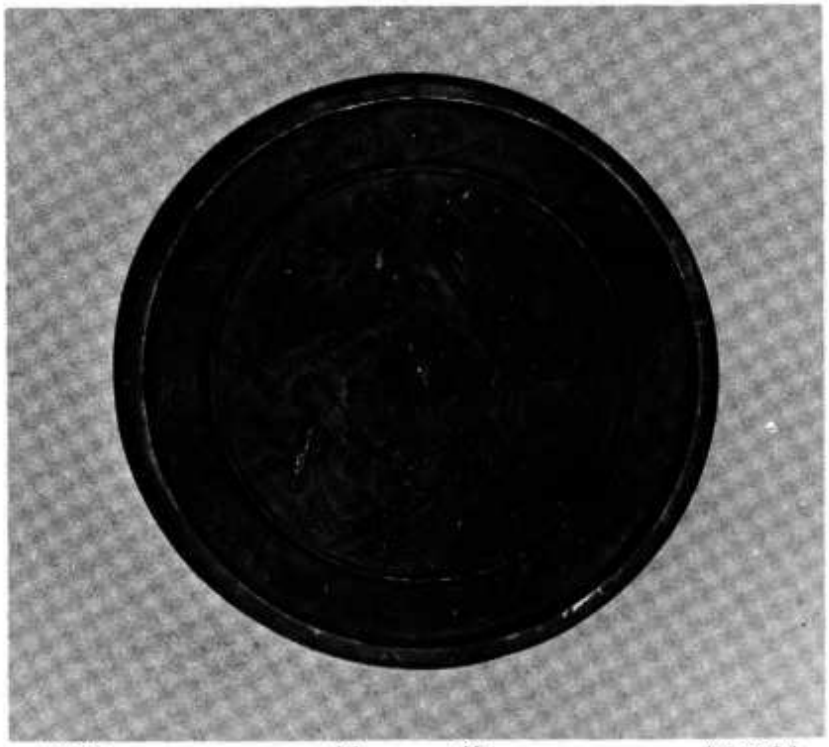

図 31　　銅　　鏡　　（その9）

図 32　　銅　　鏡　　（その10）

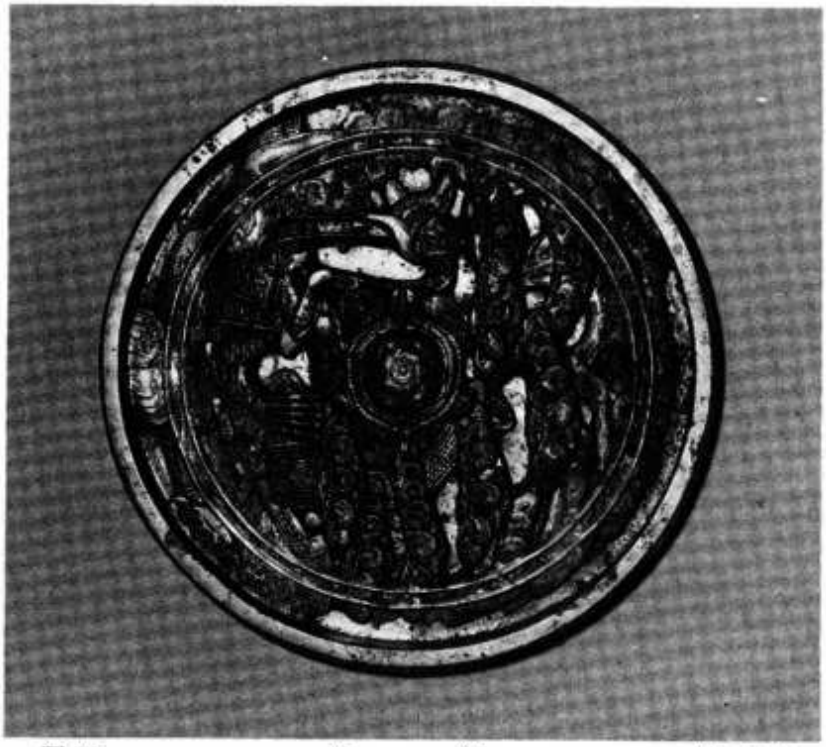

図 33　　銅　　鏡　　（その11）

図 34　　甲　冑　残　闕　　（その1）

（西都市　浜砂淳氏蔵）

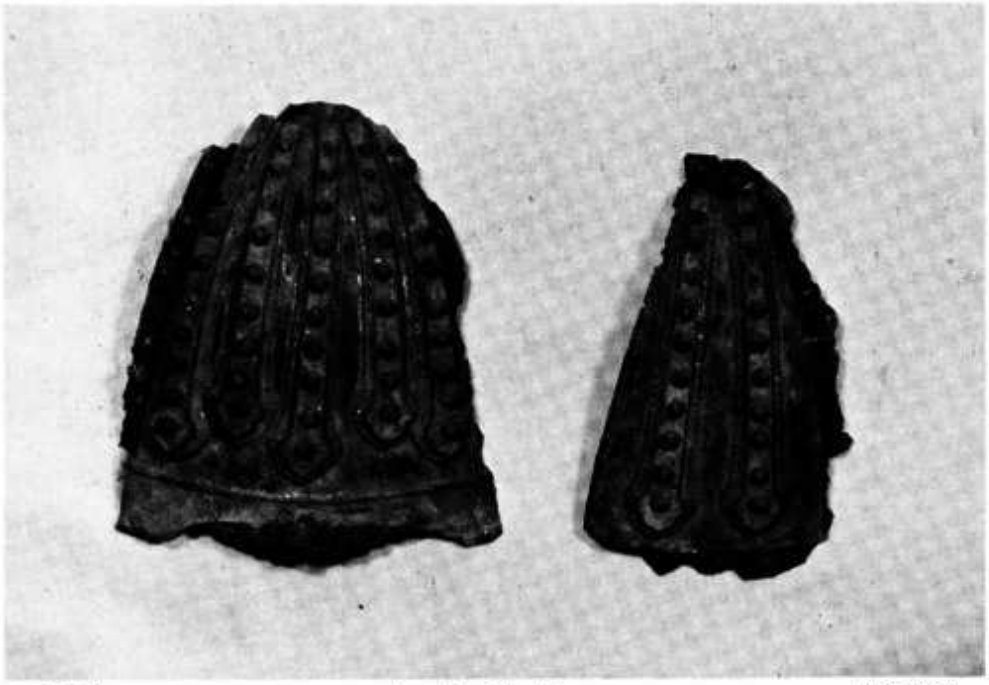

図 35　　上　に　同　じ　　（その2）

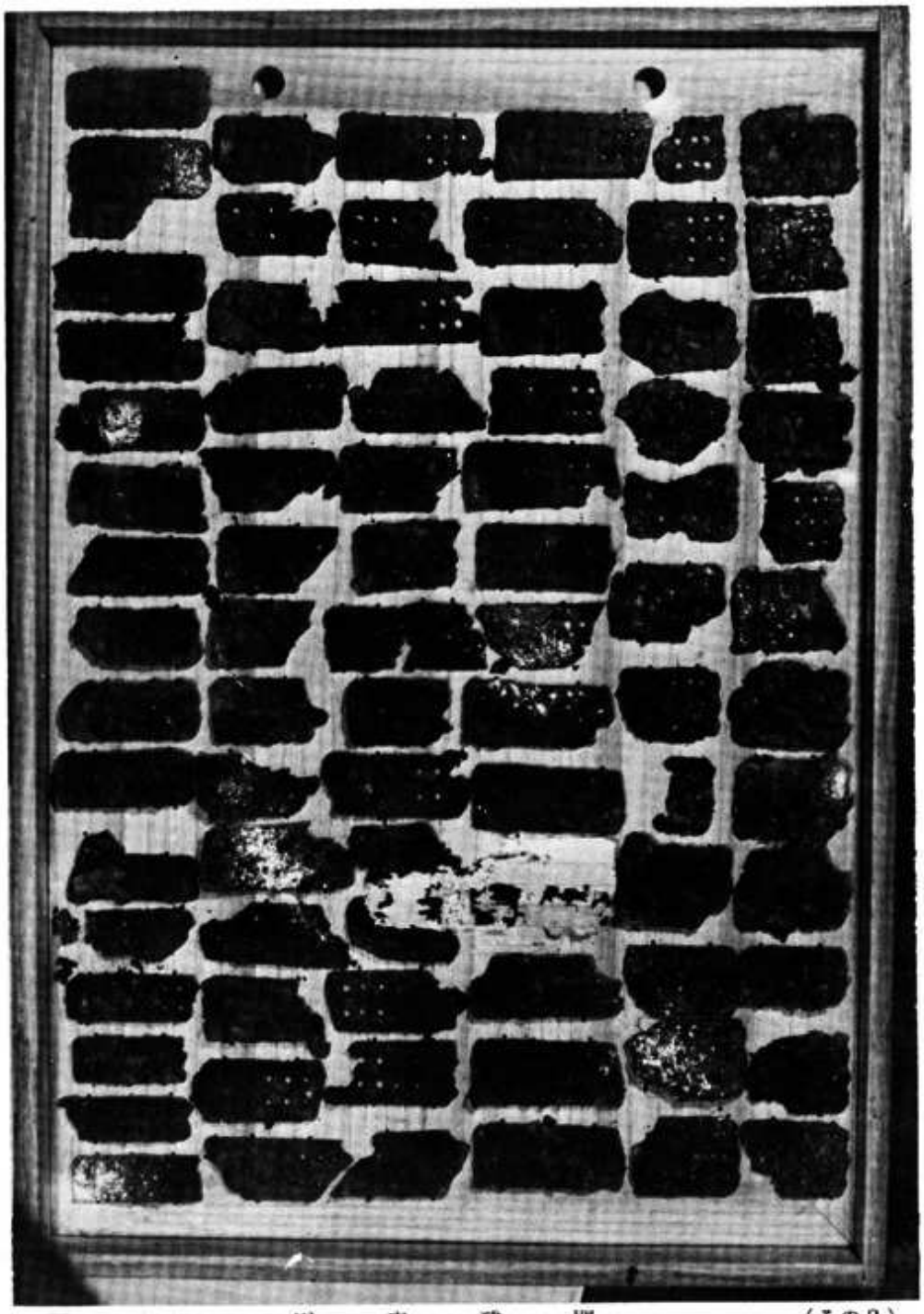

図 36　　甲　胄　残　闕　　（その3）

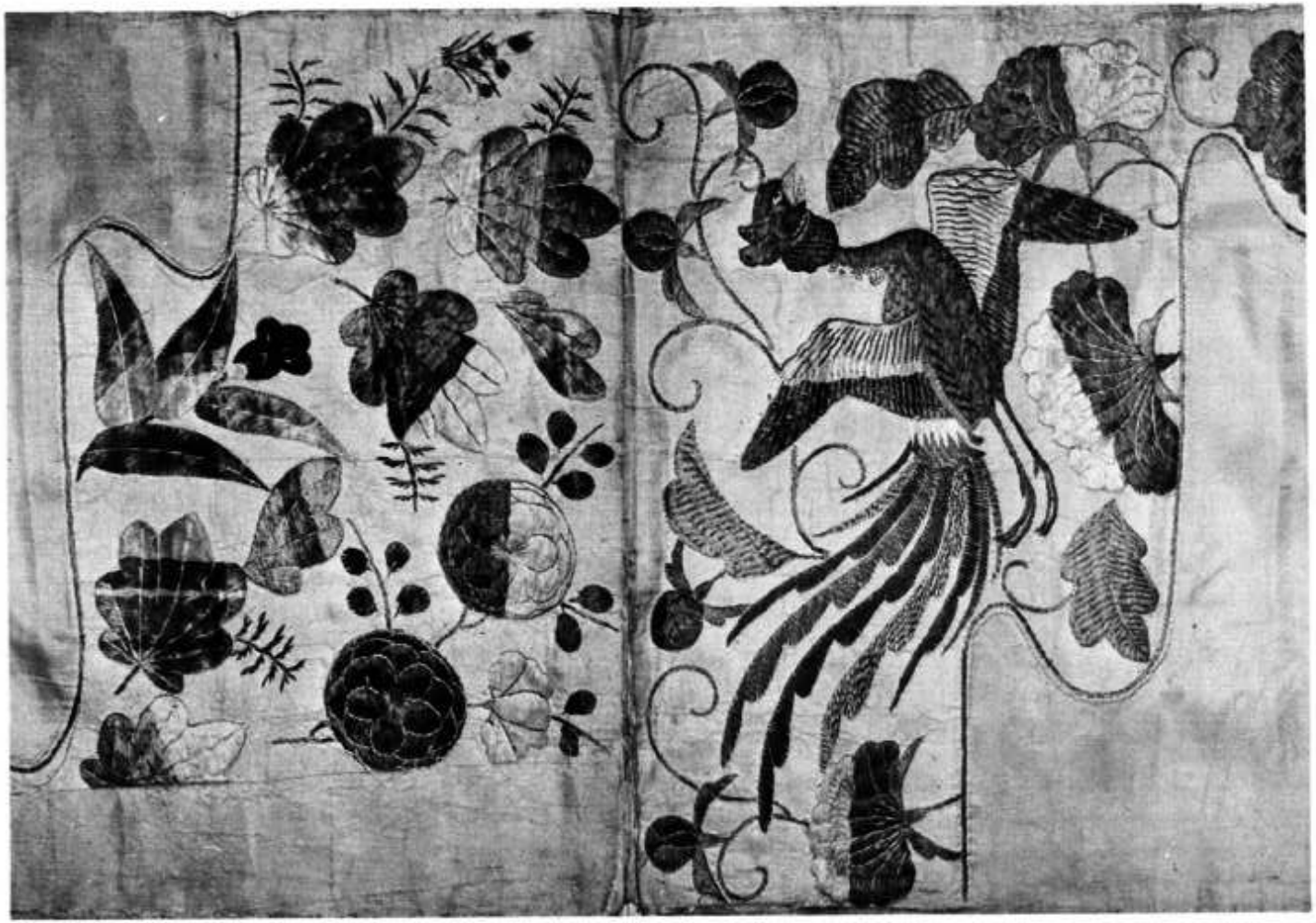

図 37　　小　　袖（宮崎市　金丸茂一氏蔵）

図 38　　肩　　衣　　（その1）

（高岡町　花見神社蔵）

図 39　　左　に　同　じ　　（その2）

図 40　巨田八幡神社本殿（全景）

（佐土原町）

図 41　　巨 田 八 幡 神 社（正面）

図 42　　川　中　神　社　本　殿
（綾　町）

図 43　元山矢村神社本殿
（西米良村）

図 44　産土神社本殿
（西米良村）

図 45　　板　　碑　（その1）

（宮崎市宝泉寺墓地内）

図 46　　左 に 同 じ　（その2）

図 47　六　地　蔵　幢　（その1）
（宮崎市　長久寺）

図 48　左　に　同　じ　（その2）

図 49　六　地　蔵　幢　（その1）
（宮崎市　伊満福寺）

図 50　左　に　同　じ　（その2）

図 51　六　地　蔵　幢
（国富町　宝光寺）

図 52　十　三　仏　碑
（高鍋町　家床公民館）

資料篇

資料篇

。鰐口の銘文

番号	西暦	和暦	干支	所在	銘文	備考
1	一三八〇	天授六	庚申	高千穂町宮本定一（荒蒲神社旧蔵）	（右）奉施入肥州味水庄泡山寺鰐口 （左）天授六　十二月十三日　願主敬白 （図1）	面径　二〇糎 総厚　八・二糎 鋳銅　撞座素文　刻銘
2	一四〇八	応永十五	戊子	五箇瀬町鞍岡清水寺地蔵堂	（右）奉施入泉御寺地蔵堂鰐口願主敬白 （左）応永十五年卯月十五日	面径　一五・七糎 総厚　六・八糎 鋳銅　撞座蓮華文　刻銘
3	一四一二	応永十九	壬辰	高千穂町大字岩戸土呂久南佐藤宮貫夫	（表）奉施入東林寺森師瑞光如来御宝前 日向州高知尾庄岩戸郷折原村居住国政敬白 （裏）応永十九年壬辰九月念九日 願主八郎　三郎	面径　一七・三糎 厚　四・五糎 鋳銅　撞座蓮華文　表裏刻銘
4	一四一四	応永廿一	甲午	延岡市熊之江町森正裕	（右）佐伯宝光寺鎮守奉施入金鼎 （中）満天宮 （左）応永廿一年甲午十月八日讃岐守大神懐世 （図2）	面径　一九・〇糎 総厚　七・六糎 鋳銅　撞座素文　刻銘
5	一四二二	応永廿九	壬寅	五箇瀬町坂本観音堂	（表）大口本国鎮西豊後州玖珠郡 山田郷岩瀬阿弥陀堂御前奉謹 主願白敬 （裏）旦応永二十九（六カ）念卯月吉日 旦那浄久	面径　一七・六糎 総厚　六・〇糎 鋳銅　撞座素文　表裏面刻銘
6	一四四八	文安五	戊辰	口南市飫肥願成就寺	（右）豊州宇佐郡安心院内上庄観音堂鰐口 （左）旦文安五戊辰二月彼岸願主道越尼敬白 （中）奉施入 （外区） （図3） （内区）	面径　一六・五糎 総厚　七・一糎 鋳銅　撞座荷葉文　刻銘

7	一四七一	文明三	辛卯	西郷村大字田代字上円野地蔵堂	(右)奉掛地蔵菩薩御宝前為窓施者現世 (左)千日文明三年辛卯八月廿日大檀那藤原秀次敬白 (右)安穏後生善処砌 (左)□慰丹村地蔵堂
8	一四八三	文明十五	癸卯	椎葉村仲塔粢師堂	(裏)(右)九州肥後国森宮四庄本間村願主多三郎檀那七郎左衛門 (左)文明十五天癸卯十一月五日施主三郎衛門敬白 (表)(右)護奉懸宝珠寺御宝前鰐口住持比丘玄智 (左)右志□□天長地久御願円満諸人快楽持者信心施主息災延命故也
9	一四八三	文明十五	癸卯	高崎町笛水椎屋椎原正三	鰐口一口願主日州柏原保内五郎右門文明十五癸卯年東善寺 十二月八日

(外区) (内区)	面径 一四・〇糎 肩厚 三・〇糎 鋳銅 刻銘。
	面径 一四・五糎 総厚 七・三糎 鋳鉄 刻銘。
(外区) (図4) (内区)	面径 一三・三糎 総厚 六・〇糎 鋳銅 撞座素文 刻銘。

以上の鰐口は第二次調査期間中、実見し調査済のもので、かつ慶長以前すなわち桃山時代以前在銘のもののみ採取した。これらのうちには、昭和十年二月刊、史蹟名勝天然記念物調査報告第十二輯、日向ノ金石文に記載していないものが含まれている。

図 1　　鰐　　口

（高千穂町　荒建神社旧蔵）

図 2　　鰐　　口（応永21年銘）

（延岡市　森正裕氏蔵）

図 3　　鰐　　口（日南市　願成就寺蔵）

鰐　　口（高崎町　椎原正三氏蔵）

図 4